
外法少女と魔法少年

平成貴族

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外法少女と魔法少年

【Zコード】

Z7199U

【作者名】

平成貴族

【あらすじ】

「君のいやらしい目つき、なかなかよかつたよー！」の中からこの褒美を選んでね！」ちょっとドジな高校生東西巡は、ある日曲がり角で美少女とぶつかりスカートの中を見てしまう。彼女は同じクラスの転校生でなんと魔法少女だった！……とベタベタな展開になるはずが、彼女は魔法少女である前に極度の変態だった。魔法によって無理やり超絶美少女に変貌させられた巡の貞操やいかに？かなりアホな変態コメディです。性転換や下ネタとかありますので注意してください。

プロローグ（前書き）

下ネタ多し。注意してください。
プロローグは飛ばしても問題ないです。
むしろ飛ばした方がいいかも？

プロローグ

わたし、魔法少女メルちゃん！

今日もバイブ機能付きのホウキにまたがって、空から愚民共を見下ろすよ！

あ、違う。ホウキのリリちゃんに乗つて、お空をお散歩するの。間違えちゃった、えへっ！

こうしてお空を飛んでいると、いろいろなものが見えてくるよ。ほら、男の人^トイレから出てきたよ。不思議だね～。すつゞ～い。今はあんな小さいカメラがあるんだね。

お父さん、深夜だからってお外に出るときは服を着なきやだめだよ？

あ～、洗濯機の中から……お兄ちゅんそれはもう洗つちやつたよお。や～んねん。

それにしても地上では下衆共が醜い争いをしていて、愉快だよね！ 人類とかさつさと滅べばいいのに。
うそそ。ジョーダン。つい本音が出ひやつた。
わたしの使命は世界の平和を守ること。
魔法で困っているみんなを助けるの。
どこかに事件はないかなあ。

……そう、わたしは常に力オスを求めているのよ。
欲求を満たすためだけに醜悪な行為に及ぶ愚かな人間。
そして人々の絶望に満ち苦痛にもだえ苦しむ表情。
もつと世界に混沌を！ 破滅を！

はっ！ いけない、ちょっとスピード違反。
リリちゃん、そんなに飛ばしちゃダメじゃない。

わへ、よだれが空中にだだ漏れじゃなこ。

あつ！ 道端でなにかもめているみたい。

いやだ、感じぢやう。じやなくつて大変、すぐに行かなきや。

「なめとんのかわりやー？ ああん？」

「……す、すいません」

「あたつとんじや肩がー。感謝料百万じやー。」

「や、そんな……」

黒光りするサングラスに黒光りする頭のおじさんガ怒つてゐるよへ。
いや～んこわ～い。

あつとアレモギラッギラに黒光りしてんだひね。

怒られてる方の男の子は～、ちよつといじりせてや～。

いつこつときは視線を斜め四十五度に落として早足で歩きまつゝ
。すたすたすた。

はい、何事もなく通り過ぎました～。これで安心。やつたね！

え？ 魔法はどうしたつて？ わかつてゐよお。今のせぬ・や・

く・そ・ぐ。

じやあこくよ～。

早く戦争になあ～れ！

テロテロソン。

「ウチ明かんわ、おつ、ちつとウチとじやがでなきあえや。若こ衆
がヒマしとむから」

「つへ、く、苦しこ……誰か……」

あ、間違えちゃった。かねてからの願望が口に出しゃつたみたい。

でもこれはこれでありだよね。きっとオーバーしちゃつくなことね。

え？ カわいそう？ しょうがないなあ。今回だけだよ？

はーいいくよ。

みんな優しくなあ～れ！

デンデンデンデン。

「う、兄ちゃん……。今……ええタツチやつたわ……。よう見た

らええ体しとるやんけ。ちょっと付き合わんかい」

「……は、はい。ここの初めだから……恥ずかしい」

「怖がらんでええ……優しくしたるわ」

「お、お願ひします……」

「うひして一人は夜の雑踏に姿を消しました……。めでたしめでたし。

あ、いけない！ もうこんな時間。帰つてお薬飲まなきゃ。
湿ったパンツも交換しないと。

じゃあね～。ばいばい。

プロローグ（後書き）

プロローグ？ なのでしょうかこれは。
最初だけですので。

外法少女登場

東西巡とうざいじゅんはあせつていた。

朝の日差しが照りつける中、鞄を脇に抱え息を切らして通学路を全力で駆け抜ける。時間が時間なため、周りにほかの生徒の姿はない。

……まずい、このままじゃ三日連続遅刻だ。おどといは携帯のアラームを設定するのを忘れちやつて、昨日は携帯が電池切れで死んでた。今日はバッテリ時間通りに起きたんだけど、それでほっとしてのんびりしていたら家を出るのが遅れてしまった。

ああ～やばい、どうしよう！

巡は汗を滝のように滴らせながら困惑の表情を浮かべる。

多少の遅刻ならそこまで思いつめる事もないのだが、そこは彼の性分である。いたるとこでポカをやらかす彼は、なんとかそれを改善しようつとまじめな学生であるよう心がけている。

だがその考え方が少しずれているところもあり、逆にその態度が

裏目に出てしまうことも少なくない。

とにかく彼はひとつとも急いでいた。

学校まであと少し。赤信号で足踏みした後、スタートダッシュで横断歩道を渡るとそのままの勢いで見通しの悪い角を曲がった。

「うわああっ…」
「きやつー！」

悲鳴とともに何かがぶつかる衝撃。巡はやわらかい物で弾かれるように後方へふつとんだ。

反射的に閉じた瞳を開くと、そこには同じ学校の制服を着た少女が尻餅をついていた。

巡は少女のスカートからわずかにのぞく水色のパンティに一瞬気

を取られたが、慌てて彼女に近寄り声をかける。

「い」「ごめん…」

「あ…いたた…」

セミロングのツインテールが似合つ少女はゆっくりと頭を起します。
くづくづした瞳と目が合つた巡は、少しじきまきした。

……かわいい子だなあ。見たことないけれど、同じ学年かな?

「だ、大丈夫?」

「うん、へーき。それより……」

少女はこいつと笑いつと明るい声で言つた。

「君が東西巡くんね。よろしくね!」

「な、何で僕の名前を……」

「魔法の力だよ。ま・ほ・う」

少女は何かのプリントを手にしながら言つた。

「魔法?…………ああ、それは僕の答案用紙!…………いかそこの名

前書いてあるし、魔法じゃないじゃん!」

「魔法でそこに落ちてるかばんから答案用紙をちゅうまかしたんだ
よ?…………どれどれ、以下の英文を日本語に訳しなさい。うーんと、
彼は大通りをまっすぐ進み、小学校の門をくぐると身に着けていた
ものを全て脱ぎ捨て……」

「そんな答え書いてないよ!」

「だから点数が低いんだね。いっぱい間違ってるよ」

「そんな問題出るわけないでしょ! 間違いでもそんな答え書いた
ら人格を疑われるよ!」

なんなんだる！」の子は……。魔法とか何とかって。

何でもいいけど出来が悪かつたからその答案用紙は返してほしいんだけどな……。

あつー！ じつてる場合じゃない、早く行かないと遅刻する！

「『めん、急ぐからー。』

「待つて！』

鞄を拾い上げ身を翻す巡を呼び止めると、少女はベルトを掴んでぐいぐいズボンを引っ張った。

横ではなく明らかに下方に向かって力が込められていたため、巡はズボンを脱がされそうになる。
その上なぜかチャックを下ろされかけていた。

「ちょっと……なにすんの！ ……なんなの？ 用があるなら早くしてよー！」

ズボンを抑えつつ強い口調でとがめる。

巡は遅刻が気になつてつい語気が荒くなつていた。

「あのや、わしきねわたしのパンツ見たよね？」

突拍子もない質問にぎくへりと体が固まる。
僕はパンツなんて見ていない。見たのは水色の布きれだ。

「いやつ、み、見てないよ

「正直に言わないと握りつぶすよお？」

笑顔でそう言い放つ少女に恐れをなした巡は、正直に答えること

にした。

「いえ、見たといつか。み、見えました……」

あくまで偶然見えたというスタンスだけは崩さない。確かにこれは嘘ではない。

……なにを要求されるのだらつ。嫌な予感がある。

「だよね～。だからあ、『じほつびをあげよ』と黙つて」

「え？ 優美？」

眞じやないのか……？

「君のいやらしい目つき、なかなかよかつたよ」

「僕そんな目してないつて！ ていうかなに『よかつた』つて！」
「とつにつかづく、評価してあげます。好きなのを『』の中から選んでね」

ポケットからさつきのプリントを取り出しピリカとひるがえす。
すると答案用紙の裏に光る文字が映し出された。

『魔法使えるようになります。ただし一次元にしか興味がなくなるよ』

『超イケメンになります。ただし男の子にしか興味が沸かなくなるよ』

『女の子になります。ただし八十歳以上の異性にしか興味がなくなるよ。超熟専。今一番人気だよー』

『ただしの後がきつすぎるよー。やつぱり』優美じやないじゃん…

「おすすめは女の子かなあ」

「それ一番最悪じゃないの!? 別に女の子になりたくないし、『メリットしかないよ!』

「ねえ、早くう〜。どれにするの?」

「どれにもしないよ! だいたいその二択しかないの!? おかしいでしょ!」

「それ以外? う〜ん、その場合は…………やつぱは『死』かなあ

「なんでいきなりそうなるの!/? とにかく全部嫌だよ!』

「えつ! 全部? よくばりさんだね〜。…………う〜ん、任せて。難しきもしないけど、わたし、やってみる!』

「ち、違つ! ちょっと、待つ!』

慌てて弁解しようとするも、体がいつことをきかなくなっていた。

少女は怪しげな呪文を口にする。ブツブツと詠唱が続く間、巡は金縛りにあつたように動けなかつた。

ちょっと、なんかよくわからぬけどやば〜! 魔法つていうか呪いみたいだよこれ!

少女は呪文を唱え終わると、いつのまにか手にしたバットほど長い棒をいやすと振り下ろした。

ピカッ!

次の瞬間巡の体を中心に戸もへりむよつた閃光が広がつた。

「うわああああ〜!』

金縛りから開放された巡の口をついて出たのは、男性のものとは思えないほど甲高い悲鳴だった。

「はい、できあがり～」

陽気そうな少女とは対照的に、あたふたと自分の体を触りだす巡。時おり「ひこう」とか「わい」だとおかしな叫び声を発している。

「ああああ～い、いい、いこよめぐるひやん。その凶心、その表情

「ち、ちよつとやめてー。」

少女は巡に近づくと、じんじんとその体をまさぐりだした。それはまるで痴漢常習者のような、熟練した手の動きだった。

「ま、まさかこんなに可愛くなつつけやつなんて……。わたし、新しい何かに田覚めそう」

呼吸を荒げた少女は、巡に抱きつき制服の上から生まれたての双丘に顔をつづめた。

「あ～。いや、や、やめて……。だ、誰か。ああ～」

まばらな通行人もちよつといぶかしげな顔をするだけで、助けに入るものはいない。

離れて見る分には、女子生徒が男子生徒にまとわりついているようにしか見えないからだ。

すれ違う男性の多くは、朝っぱらから美少女と乳縁り合っている

巡のほうに殺意を覚えるぐらうだつた。

「すーはーすーはー……。あーええ匂いや…………はー…」

「いけない、わたしたら一体なにを」

「一級の痴漢行為だよ！ 離れてよ！」

「ふーあぶなかつた。服装が逆だつたら通報されてたね。女の子には優しい時代だよね～、女でよかつたあ

「ふー、じゃないよ！ なにするんだよいきなり！」

「そんなん、わかるでしょ？ 可愛い子を見たらおっぱいに顔をうづめて深呼吸したくなる気持ち

「思つてもふつーはやらないんだよー。」

「危険だよめぐるちやんのその姿。絶対襲われちゃう。ていうか隙あらば襲う」

「何言つてんのやめてよー。 大体これ君がやつたんでしょーが！」

もともと中性的で整つた顔立ちをしていた巡は、とんでもない美少女に変貌していた。

体は丸みを帯び柔らかくなり、肌は透き通るようになくなづく纖細に。膨れ上がつた乳房はそれほどの大きさではないが、制服のブレザート下からわざかに存在を主張する。

髪型に変化がないのが唯一の救いか。それでもベリーショートと比べると長い。

……本当に女子になつちゃつたみたいだ。胸がへんだし股間がすーすーする。ど、ど、ど、ど。

困惑する巡の耳に、登校終了時刻を告げる学校のチャイムが聞こえてきた。

彼はもう一息とこりひで変態につかまつ、間に合わなかつたのだ。

さりに放心状態になる巡。

「どうしたのめぐみちゃん？ おもらし？」

「違うよ！ ……」それで今日も遅刻確定だ

「……はるかにすごいことが起こったのに、そんな事を気にしている

の……？ メルちゃんちょっとびっくりよ」

「……それも込みで」

「だいじょうぶ！ 遅刻なんて帳消しにできるよ！ 魔法の力で！」

「えっ？ ほんと？」

「うん。こうやってステッキをかざして、『激烈聖炎魔法！ 通称セフレ』ってやれば学校なんて一瞬で灰燼と化すよ！」

「だ、ダメだよそんなの！ 帳消しつていうかみんな無に帰っちゃうよ！」

「せーの、セイクレッド……」

「ちょっと何振りかぶつてんのー！」

巡は魔法を阻止すべくメルに飛び掛かった。

ステッキを持つ手を掴んだ拍子に、バランスを崩し地面に倒れこむ二人。

「ゴドッ」とアスファルトに骨が打ちつけられるような音がした。

「いたたた……」

「う、ううん……」

「だ、大丈夫？ すごい音したけど」

「……やだ、めぐみちゃん大胆……」

「うわ、ちょ、放してー！」

馬乗りになつた巡は、下から背中に腕を回され一方的にじがみつかれていた。

必死に振りほどいて立ち上がるが、筋力が弱まつたのか

メルの力が異常なのが身動きが取れない。

メルはうつとりとした表情で、スカートがまくれるのも構わずに足を絡み付ける。

……な、何て力だ。なんかいろんな関節が決まつている気がする。まずいぞ、下手すると男子生徒が女子生徒を押し倒しているように見られるかも！

もし警察に捕まつたら男装した変態女扱いされる！

かなりの危機的状況であることに気づいた巡は、手足をじたばたさせて抵抗を試みる。

だがその試みもまったく無駄であった。

「おーい、お前ら朝っぱらから何やつてんだー？」

その時、だらしないスーツ姿の男性が乗っていた自転車を止めて声をかけた。

巡は一瞬血の気が引いたが、その声の主が誰であるか気づくともがきながら助けを求めた。

「あっ、先生。僕です、東西です！ 助けて下さい！」

「おー、東西か。なあ、先生はおおらかなほうだけどなー、さすがに道端で強姦はよくないとと思うぞ」

「ち、違います、よく見てくださいよー」

「うん？ これは……逆レ プとこうやつか。勉強になるなー」

「見てないでどうにかしてくださいー！」

男性は巡の担任久世泰平。^{くせたいへい}生来のずぼらなんびり屋である。

温厚で優しそうな顔つきをしているが、性格が災いしてか三十路に突入するもまだ独身。

久世はしばらく一人の様子を眺めていたが、自分が教師である事を思い出しメルを引き剥がしにかかった。

メルの腕に久世の手が触れると、急に締め上げていた力が緩まる。バツと巡が呪縛から逃れると、メルは衣服をただしゅつくりと立ち上がった。

「いけない。わたしたち二人などこので……」

「場所も問題だけど、根本的におかしいことがあると思つよ」

「『めんね、めぐるちゃん。ちょっと後頭部を打つたみたいで意識が……』

「なかつたとは言わせないよー?」

「あつたんだけどつい素がでちゃつて」

「なにそれ怖い! やっぱり無意識に体が動いた事にしてー!」

「えへっ」

メルは後頭部をさすつつペロリと舌を出す。

その姿が獲物を前にして舌なめずつしているように見えて、巡は背筋が凍るのを感じた。

「お前らー、遅刻だぞー。」なんとかで△▽の真似事してゐる場合じゃないぞ」

「そういう先生だつて遅刻だよ」

「俺はいいんだよ。教師だから」

「それもつとダメでしょ」

巡とは正反対に余裕の久世。すでに彼の遅刻は常習化しているが、人徳のなせる業があまりそれを非難する人間はない。

「ん? ところでお前、なんか……」

久世はじりじりと巡を眺めだす。

自分が女になつた事を半分忘れかけていたおバカな巡も、その視線に気づきさつと身を縮こまらせた。

そんな彼をかばうようにメルが素早く前に出た。

「先生! めぐるちゃんを『やらしい』田で見るのはやめてください!」

「君にそれを言つ資格は絶対ないからね! 人に言つ前に自分に言い聞かせて!」

久世は不思議そうな顔をする。

「いやらしい……? うーん、東西が昨日と別人に見えるよつたな?」

「き、気のせいじゃないですか?」

「やつですよーめぐるちゃんが女子になつて犯さ……うふつ」

巡はメルの口を手で塞いだ。

「僕をかばいたいのか陥れたいのかわからないのでしゃべらせない方がいいな。」

「なんだか東西を見ると変な気分になりそうだ。不調みたいだし今日は早退しようかなー」

「……そんな簡単に休まないで下さいよ」

「あーそういうや今日は転校生が来るんだつた。ダメかー、しょーがない、めんどくさいけど行くかー」

久世は脇に止めておいた自転車に再びまたがると、ゆっくりとペダルをこぎだす。

「先行つてゐるぞー」と言い残しのうのうと学校の方へ向かっていった。

残された二人は自転車を見送りつつ立ちつくす。

そのうちメルが押さえつけられていた手の指をしゃぶりだしたので、巡は慌てて腕を引いた。

「じゅる……。危なかつたねめぐるちゃん
「むしろ」一人生きりの方が危ないよ」

腕をさわさわしてくるメルの両手を振り払つて言う。

すぐ近くで熱い視線を感じつゝも、巡は頭の中で今の状況を整理していた。

ちょっと抜けていて適応が遅い彼でさえ、自分の身に起つたことがどれだけ大事か改めて感じ始めていた。

「ねえ、この体元に戻してよー」

「えつ? なんで戻りたいの? それだけ可愛ければこれからの人

生超イージーモードだよ？」

「そ、そういう問題じゃなくて、いきなり女の子とか……困るよ」「そつかなー。もとからガチムチって感じじゃなかつたしー、男の腐つたような感じだつたからいこんじやないのかなあ？」

「そんな……ひどいよ」

「めぐるちゃんが全部つて言つから叶えてあげたんでしょう？ メルちゃん頑張つたんだから」

「全部つて……めちゃくちゃだよこんなの！」

「つまりめぐるちゃんは超可愛い女の子になつて魔法が使えるようになつたんだよ。ただし一次元のおじいちゃんしか愛せないけど」

「ただしのほうもあわせ技！？ それつてどうなつちやつてんの！？」

「つ・ま・り亀仙人でオ一一するしかないよね！ やだ、めぐるちゃんたらすつ“ご”い変態！」

「君にだけは言われたくないよー なんひとするんだよー！」

「だいじょうぶ。ちゃんと抜きどころを探しておいてあげるから」

「こらなーよ！ 大体ないでしょそんなところー いいから元に戻してつてばー！」

泣きそうになりながら懇願する男子生徒と恍惚の表情でそれを見返す女子生徒。

はたから見るとかなり異常な光景だった。

『ああ……たまらないよめぐるちゃんのその表情。今すぐ押し倒してむしゃぶりつきたい』

「む、むしゃぶり……？」

「あれ？ 声に出ちやつてた？」

「なんか直接頭に聞こえたような……」

「すごい、わたしのテレパシーを受け取ったのね！ 早くも魔法の力に目覚めたのよめぐるちゃん！」

「て、テレパシー？ ていうかそんな危険な妄想垂れ流さないでよ！」

「これでわたしの本当の気持ち……わかってくれたでしょ？」

「なにその告白！ 本当つていつか最初から裏表なかつたよね！？」

全然ぶれてない！」

「シンデレの『デレ』がきたんだよ？」

「シンなんかあつた！？ それに『テレ』とかそういう次元じゃないよ！」

「ドロシードロだよ！」

「違うよお、ぐちちょぐちよだよ」

「……それ以上近寄つたらぶつよ？」

「うん。ぶつて。思いつきりね」

脅しにもまったく動じることなく、変態少女は田を血走らせてにじつよつてくる。

貞操の危機を感じた巡は、襲いかかる魔の手をどつにかかわすとわき田もふりす一田散に学校へ向かつて全力疾走した。

転校生は美少女？

巡の所属する一年B組の教室内は、いつも以上ににぎやかだった。男子生徒の間では今日来るはずの転校生の話題で持ちきりだ。ものすごい美少女がやってくるという噂が飛び交っていた。

すでに朝のH.Rの時間は始まっているが、担任の姿がないため室内は無法地帯である。

巡はここと教室に入ると窓際から一番田の一番後ろの自分の席へ。

普段なら彼の遅刻をからかう輩が集まつて居るのだが、今日はすでに転校生の件で盛り上がり上がつているため、巡は無事に自分の席までたどり着いた。

「……巡くん、また遅刻？」
「ち、ちょっといろいろあつてさ……」
「これで二日連続なんだけど？」
「あ、はは……」
「笑つてじまかせばいいと思つてない？」
「い、いえそんなことは」
「ふん、全く……」

隣の席の女子が本から視線を外す事のなく巡を詰問する。
その不機嫌そうな態度にびくびくしながら巡は気まずそうに席に着く。

肩までかかるボーテイルとやや氣の強そうな切れ長の目。

彼女はクラスのマドンナ的存在、御厨花奈。

容姿端麗、成績優秀、高い運動神経といつも拍子揃つたパーソネル美少女だ。おまけにクラス委員長まで務めている。

だが性格はややクール。近づきがたいオーラを常に発し、特に男

子に対してはそつけない態度を取る事が多い。

それでも彼女の人気は凄まじく、その知名度たるや学校全体でも五本の指に入るほどだ。

その冷たい態度が、逆に不可侵性を高め人気をかさ上げしているのだ。

巡は前回の席替えで驚異的な幸運でそんな子と隣同士、かつ一番後ろの席というポジションを引き当てた。

だがいつもは緊張して口クに話せないし、事あるごとに威圧されるため彼女のことが苦手だった。

もちろん嫌いというわけではなく、できればお近づきになりたいと思っているのだが、うまく会話が弾まないのだ。

しかし魔法により異常性癖者になってしまった今日の巡は一味違つた。

「今日は転校生が来るみたいだね」

花奈は少し驚いたように巡を見る。彼の方から話を振られたのはおそらくこれが初めてだったからかもしないからだ。だがすぐに本に目線を落として答える。

「そうね……。女の子らしいけど

「可愛い子なのかな？　でもさすがに御厨さんにはかなわないだろうね

「そうね……」

「あははっ」

巡はなるべく低い声を出すよう努めている。元から声が高い方だつたのでそこまでの違和感はない。

だが花奈はするじくその変化を指摘した。

「なんか声が変。風邪でも引いた?」

「えつ? いやそんなことない……、あつ、ナリヤヒヒヨウと風邪
きみで」

「う~ん?」

再び本から顔を離すと、不審そうに巡の顔をのぞきこんだ。
じーっと無遠慮に見つめること数秒。
いつの間にか二人の顔が田と鼻の先まで接近していた。
そして。

ぶちゅっ。

唇と唇が触れ合った。

「わああつーな、なにすんですか御厨さんー。」

慌てて両手で体を押して花奈を引き離す。

「あなたこそなんなの? そんなこやらしげにして」

「い、いやらしげって……?」

「脱ぎなさい」

「はい! ?」

「私が薄汚い男になんて発情するはずがないわ」

「それと僕が脱ぐ事と何の関係が! ?」

「いいから黙つて脱げおらあー。」

「ひいいいつー。」

生徒達は教室のそこかしーで騒いでいるので、端っこの席で起こる凶行を特に気にかけるものはいない。

乱暴に巡の制服に手がかけられたとき、ガララと前方の引き戸が動き担任の久世が現れた。

「おーー静まれー、猿どもー」

ついに話題の転校生がきたとばかりに教室内は一気に静まり返り、教壇のほうへみんなの注目が集まる。

花奈の手も止まつた。

「じゃあお待ちかねの転校生だー、ほら入つて来い」

久世は教壇から廊下へ向かつて手招きする。

一斉に集中する視線の先から、一人の女子生徒が入室する。久世の横で立ち止まると、彼女は向き直つてあいさつした。

転校生は美少女？（後書き）

大まかな流れはものつすごいベタです。
ただ断つておきますが登場人物は九割方変態です。

転校生は美少女？ 2

「初めまして！わたし潮見^{しおみやめい}夢留^{ゆめのり}ひで言こまへす。ピッヂピチの女子高生でえす！ メルちゃんつて呼んでねつー。早くみんなと仲良くなたいなー。よろしくねー！」

「うおおおおおー！」

メルがうそんぐそこ出合に系プロフのよつな自己紹介をすると、予想を超えた美少女の登場にどーからともなく沸きあがる男子たちの歓声。

「わやーー！ わやーー！」 続いてなぜか起ころる女子の歓声。

「わたし、今まで男の人と付き合つたことなくて……だからその…。いやだ！ メルちゃんつたら恥ずかしいー。なに言つてるんだろ」

「うー

メルのわざといじい処女アピールが終わつたところで、喚声は最高潮に達した。

メルは恥ずかしがる振りをしながら、室内をきょろきょろと見回す。明らかに獲物を探す目つきだつた。

そして隅の席で机に突つ伏している巡を田ぞとく発見した。

彼はメルが教室に入ってきた瞬間、花奈が固まると同時に隠れるようにして顔を伏せていたのだ。

「さて小芝居はもういいかー？ やーー潮見の席は、と

先ほどメルの痴態を田の当たりにしていた久世はなんともなしに言ひ。

「先生、わたしめぐるちやんの隣がいいですー。」

びしつと巡を指差して言ひ。

「あー東西か。お前ら仲良しかつてたもんない。まー好きじる」

「やつたあー」

クラス中から「めぐるちやん?」「知り合いつ?」「巡の野郎、どういうことだ?」「などとこつた疑問の声が上がる。
メルはおかまいなしにすんずんと巡の席に歩み寄る。
そしてかたくなに顔を伏せているその首筋にふと息を吹きかけ
ると、巡は「わあっ」と顔を上げた。

「どうしたのめぐるちやん、気分でも悪いのかなー?」

「なんで、君が……」

「君だなんて、メルちゃんって呼んでくれなきゃいたずらしちやうよ?」

「め、メルちゃん。……ま、まさか転校生で同じクラスだなんて」「なんて僕はついてるんだね!」

「変なモノマネしないでよ! その声全然似てない!」

どうなってるんだ一体。僕はどうすれば……。

巡は目の前の光景を認めたくなかったが、メルがここにいるのは
紛れもない事実だ。

彼は観念して思考を止めた。

「メル……久しぶりね

その時横の席に座っていた花奈が、メルに向かって言い放つ。

「あつ！ クリちゃんんだ！ クリちゃん」んなとこにいたのー！？」

「ぶつ！ その呼び方はやめなさいって言つたでしょー！」

「みくりや、のクリだよ？」

「なんでそこ抜き出すのよー。//クリちゃんとカナちゃんとかいくらでもあるでしょー？」

「まさかクリちゃん、変な想像して……」

「黙りなさいこの変態女！」

「なにを自分でって！」

一人が話しだすやいなや、こきなり険悪なムードになる。

「ねえ、クリちゃんの席どいてよ」

「なんで私がどかなきやならないの？」

「ふ～ん、じや鬭うしかないね」

「望むところよ。わからせてあげるわ、眞の天才が誰なのか」

「一瞬で消し炭にしてあげるよ」

さらにヒートアップする一人。メルの発言に巡は肝を冷やす。め、メルちゃんまさか魔法を使つつもりじゃ……。こきなり鬭つとかつて単語が出る時点で普通じゃないよ。

彼は自らを女に変えたメルの恐ろしさを知つている。

このままにしておくと何がどうなるかわかつたものじゃない。嫌な予感がした巡は慌ててメルを止めに入った。

「メルちゃんダメだよ、魔法なんか使つたらー…」

「えつ、なんで？」

「巡くん、大丈夫よ。私も魔法使えるもの」

「え？」

「氣をつけてめぐるちゃん、その女、とんでもないレズだよーーー！」

「ええつーー？」

「なるほど……、メル。巡くんのこれ、あんたの仕業ね」

「なんか納得してるー!? ていつか否定はー!? 早く否定してー!」

「クリちゃんは可愛い女の子なら見境いなく食べちゃうんだよー！」

近寄っちゃダメ！」

「そんな……。でもメルちゃん自分だつてそつだよねー!? 人の事言えないよー！」

「わたしは違うよー！ だつてわたしバイだものー！」

「全然違くないよー！ もつと危険じゃないかー！」

メルの発言に教室内はどよめきに包まれる。

口々に言い合つクラスメイトたち。

「バイがよーーー。」「これでこのクラス四人目かーーー。」「それなら私も望みがあるわー！」「いえ私よーー?」「花奈ちゃんやつぱり……俺はこれからメルちゃんに生きる」「何よあの女、私の花奈様に……！」

もつやだこのクラス……。

「お前らまだホームルーム中だぞー。レズだのホモだのは休み時間にやれー！」

「違います先生！ バイセクシャルですー！」

「あー悪い悪いバイな」

そんなの謝らなくていいよ先生……。それに休み時間でもやらないでほしいんだけど……。

「潮見は転校生用に持つてきといた机使えー。隅に置いてあるやつ。それとそんなに隣がいいなら右隣にしどけばいいだろー」

メルは結局窓際から三列目の一一番後ろに机を置く事になった。

机をやや巡によりに寄せて満足したように席に着く。

ほぼ総立ちになっていたクラスの面々もおののおの着席した。

「じゃあーさつさと始めるかー。えー、今日は特になんもないなー。もうそろそろ秋だからなー。季節の変わり目には変な人が出没するから気をつけろよー」

「はあーい！」

「メルちゃんいい返事だなー。自分のことだつて自覚してくれればいいんだけどなあ。

「じゃー終わり。あ、そうそう一時間目の英語なんだが、清水先生警察に事情聴取されてるから遅れるらしいぞー。来るまで自習なーん？ 何で事情聴取されてるかつて？ 駅で痴漢と間違われたらしきぞー、本人が電話でそう言つてたそうだ。まー大方本当にやつたんだろうけどなー。もつ会えないかもなー」

久世はほんの少しだけ残念そうに言い残すと、さつさと教室から出て行つた。

かなり適当なホームルームだったが、いつもこんな調子なのでみんなもう慣れっこなのだ。

生徒の間に事件を起こした先生の事が話題に上る事はなかつた。みんなわりどりでもよかつた。

そんなことより関心は転校してきた美少女に向かられていく。再び騒がしくなる教室。

いつしかメルの席を取り囲むように人垣ができていた。

クラスメイトによるメルへの質問攻めが始まった。

「趣味は?」「好きな食べ物は?」「血液型は?」「どこに住んでるの?」「好きなタイプは?」「スリーサイズは?」「今日は何色のパンツはしてるの?」「初経はいつ頃?」「オニーは週何回?」

メルはにこやかに全ての質問に答えていた。

その横で巡はずつとうつむいたままだ。

彼は女の子になつた自分の異変にいつ誰が気づくかもしれない恐怖に、生きた心地がしなかつた。

時おり起ころる笑い声にびくつきながら身を縮こまらせていくと、左隣の花奈がひそひそ耳打ちしてきた。

「ねえ、女の子になるってビックリう氣分?」

疑う様子もなくそう問い合わせてくる。巡はそのままに心臓が止まりそうになつた。粗いを研ぎ澄ました一撃。

だが努めて平静を装いとぼけてみせる。

「な、なんのことだかさっぱり……」

「隠しても無駄よ」

彼女の狩りセンサーはいち早く巡の正体を見破っていた。

なぜかメルと知り合いだつた彼女は、巡がおそらく何らかの魔法をかけられたのだろうと当たりをつけたのかもしれない。確信を含んだその強い口調に言い逃れはできないと悟つた。

「で、できれば秘密に……」

「いいわよ。その代わり……、わかつてゐるわよね？」

妖しく微笑む花奈。理解が追いつかなかつたが、不吉な予感だけははつきり感じとつた。

「私はとにかくだわるの。その中でもあなたは過去最高の逸材よ」

「あの、ちよつと何を言つてゐるのか……」

その時一時間目チャイムが鳴る。隣ではあらかた質問も終きたよつて、これが合図になつたのか一度解散になつた。
みんな席に收まりはしたが、やはり教師が来ない。自習といつてもほぼ休み時間と変わらない状態だ。勝手に席を出歩いているものもいる。

とはいえてあまつうめぐらしくすると隣の教室から教師が怒鳴り込んでくるため、先ほどのややトーンは落ちていた。

「じゃあ手始めに女子の制服を着てもらいましょうか」

「全然秘密にしてくれる氣ないよねそれ」

巡はまだ花奈に絡まっていた。とはいっても隣の席なので逃げようがないのだが。

「ちょっと、わたしのめぐらしあんこちよつかい出すのやめて欲しいんだけど」

メルが二人の間に割つて入つてきた。

「相変わらずねメル……。にしてもあんた、性転換魔法なんて禁呪

レベルのものをためらこなく使つなんて……。小学校に戻つて道徳の授業だけ受けてきなさいよ」

「わたしだつて悩んだんだよ? めぐるちやんを他の女に取られなによつてするために苦渋の決断を」「

「うそつき! ノリノリだつたよね! ? しかも変な性癖までつけてくれちゃつて! 」

「だーかーりあ、それもめぐるちやんがメルちゃん以外の女の子に田移りしないようについて。ぜーんぶめぐるちやんのためなんだよ? 」

「全部自分のためでしょ! 大体僕がメルちゃんに惚れてるつて設定からしておかしいよ! 田移りもくわもないよ! 」

「またまたあ~」

「またまたじやないよ! 」

花奈が不敵な笑みを浮かべメルに向づ。

「メル、裏田に出たわね。すでに巡君、いえ巡りやんのお口は私がおいしく頂いたわ」

「ええつ! ? や、そんな! めぐるちやんの下のお口が蹂躪されつくしかけやつたの! ?」

「そんなこと誰も言ひてなによ! 」

「なんのこと……く、くせしこ……あれ? でもなん

か興奮する……なにこの胸の高鳴りは……」

「まあ巡りやん、やつきの続きをしましょうか

「ああつ! ダメめぐるちやん! 」

「……メルちやんがよつと落ち着いつよ。れつきからおかしこよ呼吸荒すぎだよ」

「は、はあはあはあ……。これが寝取られ……? 新たな性癖に田 覚めそつ……」

「お願ひだからもう! 」れ以上進化するのはやめてよね……」

メルは高潮させた頬に両手をやる。

棒立ちのメルを横目に花奈はちよこちよこと手招きする。

「そ、巡ちゃん。バラされたくなかったらひちに来て『』奉仕しないさい」

「嫌だよ… 急にどうしちやつたの御厨さん… そんなキャラじやなかつたでしょ…？」

「あまりにも巡ちゃんが可愛すぎて理性が飛んだの」

「その割には冷静だよね…？」

「私の理性がちょっとでも残っている間に早くしなさい…」

「ひえっ！ む、無理だつて！ それにこんなとこりで騒いでたらみんなから注目浴びちゃうよ…」

「私は見られた方が燃えるの」

「僕は絶対嫌だよ！ ……メルちゃん、うつとりしてないで助けてよー！」

メルは呼びかけにも答えず恍惚の表情で言に寄られる巡を見つめていた。

……完全にツボ入っちゃってるよ… もうダメだこの人…

『はあはあ……ああダメ……。もうガマンできない。でもいいのオーネしたらめぐるちやんに嫌われちゃう…』

うわあ、やっぱよ、やっぱいテレパシー届いちやつた！

僕に嫌われるっていうか転校初日から社会的信用を失うよ…

『ああ……めぐるちやんの蔑んだ視線を感じる……。なんていい日をするの……それだけでわたしもつ……。でもダメ。このままだとちよつと変な子だと思われちゃう』

大丈夫、安心して！ もうとっくに変態通り越してるから！

巡は一方的に発信される放送禁止電波にただただ戸惑うばかりだ
つた。

その時教室の引き戸が音を立てて開いた。

話し声が止み、クラス中の視線が一気に前方の出入口に集まる。

「おはよう諸君!」

現れたのは一人の男子生徒。よく通る声で誰にともなくあいさつをしたが、誰一人返事するものはなかった。

クラスメイト達は何事もなかつたかのように再びおしゃべりを始める。

「つち、面倒なのが来たわね……」

花奈が抵抗する巡の腕を引っ張りながら舌打ちする。

クラス全員から無視された男子生徒は、巡の前の席、すなわち自分の席に向かつて歩き出した。

その間も彼は笑顔でありさつを振りまくのを忘れない。

周囲からは「あ、ああ……」「お、おはよ……」「ち、近寄るな！」、「俺が悪かった！」といつたあいさつが返つてくる。

そして最後に花奈の魔手を振りほどいた巡の前で立ち止まった。

「グッモーニング、巡」

「あ……うん」

横流しに垂らした長めの前髪をむつとかきあげ、綺麗に生え揃つた白い歯を見せて笑う。

彼の名は美道衆。みどうしゅう クラス中から腫れ物扱いされる彼は、これでいてしかし芸能人負けの美少年である。

血口愛の強い性格である彼は、根拠のない自信に満ちた言動が多くいちいちウザい。そして寒い。

とはいえる一年B組の生徒達は比較的おおらかで優しい子が多い。単純にちょっとウザいからといって人を嫌つたりはしない。それにモデル並の容姿を持つ彼なら、嫌われるどころかクラスの人気者であつてもおかしくないぐらいだ。
もちろんこれは彼に対するやつかみとかそういう類のものではない。だが彼を擁護する事は誰にもできないのだ。
なぜなら。

美道はナルシストである以前にホモであり変態だった。
その倍がけされた破壊力は想像を絶する。

「ちょっとあんた、遅刻なんだけど？ なに偉そうにしてんの？」
「今日はちょっととな。朝から不良に絡まれていてる少年を助けていたのだ。もちろんアドレスもゲットした」
「災難ねその子。不良に絡まれた方がずっとマシ」「はつはつは。早速メールを五件ほど送つておいた」
「笑えない。……あーヘドが出そうだわ」

花奈は心底嫌そうな顔で吐き捨てた。

嫌悪感丸出しではあるが、これでもクラスで美道とまともに会話できる数少ない存在だ。

「ところで巡。今日は遅刻しなかったのか？ もし今日も遅刻したら何でもボクの言う事を聞くという約束だつたはずだ」「えつ、あ、いやそれは……」「残念ね。もう巡ちゃんは女の子なの。あなたの出る幕はないわ」「……はつ、何をバカな

ちらりと巡を見やる美道。
巡は慌てて視線を逸らす。

「む？ むむむ？」

さらに顔を寄せてくる美道。

「なん……だと？」

明らかに彼の表情が変わった。
髪型や服装に変化はないにしても、普段から巡をよく覗姦している美道にとってその違いは一目瞭然だったようだ。
巡はもはや美道に隠し通すことは不可能だと感じた。だがこうも考えた。

もしかしたらこれで狙われる事はなくなるかも。美道くんがいくら騒いでもみんなスルーするに決まってるし。
ここはおとなしく本当の事を言った方が得策だ。
そして小刻みに体を震わせる美道に向かつて言い放つ。

「ほ……僕、女の子になっちゃったの」
「……そ、そんな……バカなあああつ！－！」

絶叫する美道。その叫びは教室内に響き渡つたが、みんな聞こえないフリをして彼の方を見ないようにした。
決して関わってはいけないのだ。
ややあって美道はその場に崩れ落ち、沈黙した。
ある程度リアクションを予想していた巡だったが、それでも引いた。結構引いた。
花奈は勝ち誇ったようにその様子を見てせせら笑う。

「ふん、いい気味だわ。ねえ巡ちゃん、今のもつ一回言つて。なんかよかつたわ」

「や、やだよ！」

「いいの？ そんな口の聞き方して」

「あ……あう」

「つづくまつた美道を一切フォローすることなく放置し、花奈は再び巡にちょっかいを出し始める。

しかしもはや再起不能かと思われた美道は、意外にもすぐに立ち上がった。

その瞳はつっすりと濡れていたが、奥底に達観したような力強さがある。

きつと新たなターゲットのことで頭をフル回転させているのだろう。

「ふう……。ボクとしたことが、取り乱したな。巡はもう死んだ。またひとつ五星が落ちてしまつたが、下を向いてばかりはいられない」

「僕まだ生きてるけど……」

「安心しろ。敵はとつてやるぞ。にしてもなんたる悪行！ ビーの

どこつだ！ こんな血も涙もない悪魔のような真似をしたのは！」

「……確かにそうなんだけじょっと怒りの根底にあるものが違うような……」

「巡、誰にやられたんだ！？ 地の果てまで追いかけて男子の良さを説いてやるー！」

こきり立つ美道に迫られ巡は困惑の表情を浮かべる。

「ど、どつしょつかな……。正直に言つてもいいんだけど、あんまり争いごとが起きるのは避けたいなあ……。

まいづく巡の代わりに、花奈がびしつと指を差して言った。

「犯人ならそこにいるわよ」

「……むう。さっきから危ない表情で呆けたように立っているからずっと無視していたのだが、一体なんなんだこの子は」

美道がやや当惑した顔で言う。

さすがメルちゃん！ あの美道くんにも軽く引かれてるよー！

そこには、かの変態少女がなおもうつとりと妄想トリップ中だつ

た。

「おー、そこの君。何者だ、名を名乗れ」

美道がやや警戒気味にメルへ呼びかけた。

「…………めぐるむちゃんほりほり、すつごーかめはめ波だよー。
感じるでしょ?」

「おわっ! 何だ?」

メルの口からブツブツと声が漏れる。だが彼女の視線はどこか宙をさまよっていた。

さりに警戒心を強める美道。

「危険だぞこの女、いきなりわけのわからん事を……」

「メルちゃん、しつかりしてよー、ねえ!」

巡がメルの肩を掴んで揺する。するとその瞬間ガツと手首をつかまれたので本気で振りほどいた。
どうやら彼女が覚醒したようだ。

「あら? わたしつたら一体何を……」

田をぱぱくじみせ、よだれを拭うメルに美道が詰め寄る。

「巡を無残な姿に変えたのは君か?」

「わつ、すごいイケメン。なんかいきなり迫られちゃつてる?」

「君も花奈と同じく好き勝手している口か」

「わあ、女の子みたいに綺麗。メルちゃんかよっとときめこむやつ

かも

メルは質問を無視し、ちりぢりと巡に視線を送りながら言ひ。

「な、なに？」

「うふつ、「冗談だよめぐるちやん。今はめぐるちやん一筋だから安心してね」

「いや、僕のことは全然気にしないでいいよ。うふ、本当にいいから

「自分から身を引くとするなんて。なんていじらしくのめぐるちゃんつたら」「

巡は頭をなでようとした腕をスウェード回避した。さつきからことじごとく質問をスルーされ、やや険しい顔つきの美道に花奈が横から口を出す。

「美道、その子がメルよ。あなたも聞いたことあるでしょ？」

それを聞いた美道は少し驚いた表情で口を開く。

「なに？ 君があのメルか……。噂は聞いていたんだ。十年、いや一十年に一度出るかどうかの変態らしいな」

「そんなことないよ、せいぜい十人に一人ぐらうだよ」

「……メルちゃんレベルの人人がそんなにぞろぞろ出られたらまるないよ」

「といふことは……メル、禁呪を使つたな？ 男を女に変えてしまつなどボクや花奈にはできない芸当だ」

美道も花奈と同じように巡の変化が魔法によるものと考えていた。彼もまた魔法の存在を知るものようだ。

巡は花奈と美道、一人の理解の早さに内心驚きながらも不安そうに尋ねる。

「あの、禁呪とかって物騒な単語出たけど、僕大丈夫なんだよね？」

「だいじょうぶ。ただの魔法だよ、マホウの一種」

「ただの魔法って言われてもすごくひつかかるんだけど……」

「あーあ。にしてもクリちゃんに狙われちゃうんだつたら女の子にするんじゃなかつたなあ。勢いでやつて撲しちやつた」

「ちよつと… そんな簡単に後悔しないでくれる！？ 僕はどうなるのさ！？ 責任とつてよ！」

「もちろんだよ。ちやんとかわいがつてあげるよ！」

「そういう意味じゃなくて、元に戻してつてこと！」

「呪いを解くのはさすがのメルちゃんでもちよつと難しいの」

「いま呪いつて言った！ 絶対言った！」

「えへっ」

「えへっじゃないよ！」

ペロリと舌を出すメルにつかみかかりたい気分になつたが、近づくと逆に襲われる危険性があるため踏みどどまつた。

一人のやり取りを見ていた美道が、嘆くようにため息をついて言う。

「うーむ。……お湯でもぶっかけたら男に戻らんかな」

「そんな某一分の一ついで漫画じゃあるまいし……」

「アレを顔にぶっかければ戻るかも！」

「……アレって？」

「やだ、めぐるちやんわかつてるくせに。あの白こうすむつとした

「……」

「うん、わかつたからもう言わなくていいよ」

「そうか。ちよつと待つてろ巡。今ボクが……」

「やめて。本当にやめて」

ズボンのファスナーに手をかける美道を止めぬ。
美道は不満の表情で巡を見返した。

「何をする巡。何事も試してみなければわからないではないか」「つるせこつるせこ」

「一人とも、なにか勘違いしてる? メルちゃんが言つてるのと違うんじゃないの?」

「えつ? ジャ何の?」

「うどんだよ?」

「なんでもうどんだよ! そんなものかけてびりするのセー!」

「だつてえ、ぶつかけうどんって言つでしょ」

「だからって僕の顔面につどんなんかけてもなんにもならないでしょ!」

「そつかあ……。でもぶつかけうどんってすつじーネーミングだよね。メルちゃんいつつも恥ずかしくて注文できないの」

「それは変な事考えてるからじゃないの? それにさつきから連呼してるけどその調子なら楽勝で注文できるよね?」

「なあ巡、ならボクはぶつかけうどんにぶつかければいいのか?」

「衆くんはもうしゃべらないで」

巡は冷たい視線を美道に送った。

だが美道は余裕そうにあごに手をあてながら、改めて巡の全身を眺める。

「……いや待てよ。男装した女子か……。一見男子でありながらもその実女性のような美セ……。アリはアリだな」

「えつ?」

「メル。少しボクも熱くなりすぎた。君の気持ちもわかる。今回の禁呪は特別に不問にしよう。いや、むしろ感謝すべきか」

「うん。でも巡ちゃんにちよっかい出ししゃダメだよ?」

「はつはつは。それはどうかな。ボクは美道衆。よろしく

美道が次のレベルに上がったことで、二人は和解した。

変態が握手を交わす横で、巡は一人絶望の淵にいた。

どうしよう。このままじゃ本当に元に戻れないかも知れない。

それに次から次へ変な人が集まって、ものすごく嫌な予感がする。

僕は一体どうなってしまうんだろう……。

どんよつと沈む巡に、メルが明るく言つた。

「めぐるちゃん、そんなに落ち込まないで。いくらメルちゃんだつてその場のノリで初対面の人の性別を変えて人生を狂わせるような事するわけないでしょ？」

「したよー。誰を前にしてそれを言つのやー。」

「怒っちゃいやん。だいじょうぶ、お兄ちゃんに頼めばきっとなんとかしてくれるよ」

「……お兄ちゃん?」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ。すうじい魔法使えるんだよ。わたしよりず一つとすうじいの。でもロリコンで童貞だけど」

「ボクもお兄ちゃんにはお世話になつてているんだ。あの人はすごいぞ。魔法で大金稼いだり動かしたりしていて、政界にもコネクションを持つんだ。ただしロリコンで童貞だけど」

「え? どうこう」とだろう。メルちゃんと美道くんのお兄ちゃん?

「一人は姉弟……、なわけないし。」

「お兄ちゃんは魔法を生み出した人で、私たちは彼のつくった魔法学校で魔法を学んだのよ」

首をかしげる巡に、席に戻った花奈が説明する。彼女は少し教室が騒がしくなってきたため注意して回っていたのだ。表向きは眞面目なクラス委員長なのである。

「え~と、なんでお兄ちゃんなの?」

「本人がそう呼んでつて言つから」

「そ、そ、そ、う、な、ん、だ、
」

巡はせりてこんながらがつわづなつつか、とつあえず浮かんだ疑問を口にする。

「魔法学校」

「そうよ。私とメルはそこで知り合ったの」

「やつぱり御厨さんも魔法を……？」

「ええ。 そのホモ男もそこそこ使えるけど、別口で覚えたみたいだから私たちと面識はないわ。同じクラスになって『君魔法使ってるだろう』って言われた時は驚いたわ」

ちゃんと命じられたんだ。なのにこの女とせたりやつたい放題で困つてゐる

「え？ でも僕そんなの見たことないよ？」

「裏で『ソノソノ』やつてるんだ。花奈の成績がいいのも運動ができる

「確かに見えるのも全部魔法のおかげだ」

ふん、使えるものを使って何か悪いの？

などんでもなことなしてないし、やの辺はわきまべてゐつもつよ「のせんばうじゆかへ メテラト懲議じうじゅうぶ。

「メールがやん、業だつて、ハハ加減怒るよ?」

いいよ。どんどん責めて。なじって、

メルは全くひるむ」となく巡に身をすり寄せるつとめ。
美道はそろばんメルを見ていのちの髪をつぶ。

「ああ、花奈に加えてあのメルまで見張らなければならないなんて。
これはお兄ちゃんに一度相談しようつか」「ちょっと、話が違うでしょ。口止め料として私に寄つてきた男子

をあんたに紹介してあげてるじゃない。あんたがその気なら」ひち
が逆にチクつてもいいのよ?」

「むむ……。まあここのは穏便にいっていいじゃないか花奈くん」

「ふん、わかれればいいのよ」

「うわっ、ひどい。すごいズブズブだよこの一人。

でもこれで御厨さんがあまりにも完璧な理由がわかつたぞ。にし
ても一体どういう魔法を使っているんだろうか……。

「さて、もうこの話はおしまい。私はできるだけ事を荒立てたくない
いの。一応言つておくけど巡ちゃん、もし一般人にしゃべったら…
…、わかるわよね?」

花奈が巡の体をなめまわすように見て言つ。

その視線に悪寒を感じた巡は、無言で「ククク」とつづいた。

「巡……。できればボクの性癖の事も秘密にしておいてくれないか
「それは無理。もうみんな知つてる。かなり前から知つてる」
「ははっ、そんなわけないだろ?」

陽気に笑う美道を放置し、勝手に携帯で写真を撮りつつしている
メルに確認する。

「メルちゃん、とにかくそのお兄ちゃんつて人に僕を元に戻しても
らうよう頼んでよね」

「わかつてるよ。それは放課後になつてからのお楽しみ。ほうり、
こいつ向いて~」

本当にわかつてるんだろうか……。

巡はマイペースなメルにうんざりしながら、一方的に始まった撮

影会が早く終わるように願っていた。

その後も巡は変態魔法使いたち（主にメル）にいじられつつも、なんとか無事に放課後を迎えた。

メルは教科書がないと言つては巡の隣にべったり寄り、校内を案内して欲しいと言つては空き教室に連れ込もうとしたり人気のない女子トイレに引きずりこもうとしたりで、とてもアグレッシブな一日を送った。

一方の巡はすでに疲労困憊だった。メルの執拗なアタックに加え時おり花奈や美道と繰り広げられる争奪戦。

美少女転校生と初日からいちゃいちゃする自分に向けられるクラスメイトの嫉妬や殺意。

普段それほど目立つことのない彼にとつては針のムシロに座る思いだつた。

唯一の救いは巡の変化に気づいたものがいなかつたことか。

巡の周囲が騒がしい事に不思議そうな視線を送つてくるクラスメイトもいたが、それでも彼が性転換している、などとは夢にも思わないだろう。

とりあえず現段階では誰もそのことに言及してこない。これも普段からおとなしく女々しい巡の態度のおかげか。

最後の授業が終わつて氣が抜けるのもつかの間、巡は隣のメルに問い合わせた。

「メルちゃん、放課後になつたけど僕を戻してくれるつて話、覚えてるよね?」

「もつちろん!」

メルは元気よく答えた。この反応なら知らんぷりはされなさそう

だと巡は安堵する。

だがメルが人差し指を口にあて、なにやら思索するような顔をしだすと一気に不安が押し寄せた。

「……でもお、よく考えたら今日まだいいよね」

「な、何で？」

「だつてめぐるちやんも帰つてからその体でじつべつオ　ーーとかしたいだろつし」

「な、なんてこと言うんだよー。そ、そ、そんなのしないよー。」

「えつ！？　女の子の体フリータイムでさわり放題いじり放題なのに！？」

「なにそのすりこ驚きよつせー……大体今はとてもそんな気分になれないよ」

「あつ、そつか。今は一次元のおじこさんしか興味ないんだっけ。残念だね」

「ひへ……」

がくんとうなだれる巡。

だがそのおかげでいつもは女の子とは口くに話もできない巡が、メルや花奈とある程度渡り合えてこるもの事実である。

「じゃあそれはいいとして、お兄ちやんにお願いしに行つて、すぐ男の子に戻れるかどうかはわからないんだけど」

「うん」

「どのみち戻る前に両親の同意が必要なの」

「え？　なんで？」

「それは未成年なんだから当然でしょ？」

「女にする時は問答無用だったよね！？　なんで今度はそういう手

続きがいるの！？」

「きやつ、めぐるちやんスルトイフー！　抱いて！」

「なに」「まかそつとしてるんだよ… 誰だつておかしこと思つよ。」

「『まかさないで抱いて！』

「つむれこよ、声がおつき… … … 言つとくけど家には父さんしかいないよ？ 母さんはでていつむけられたから」

「ふ〜ん。じゃあそれでもいいよ」

「じゃあつてなにさ… … わつき両親つて言つてたけど本当に大丈夫なの… … ？」

「さつそく行こつか。早く早く」

疑問の声を無視し支度を済ませたメルは、巡の腕を引っ張り促す。早々に教室をあとにしようと/orする一人に、やはり横槍が入った。

「ちょっとメル、抜け駆けは許さないわよ？」

隣でにらみを利かせる花奈。

気後れすることなくメルは言い返す。

「クリちゃんはめぐるちゃんとずっと一緒にいたかもしれないけど、わたしは今日初めて会つたんだよ？ いいでしょこれぐらい

「といつても半年ぐらこよ？ それに異性を意識したのは私だつて今日が初めてなのだし」

「異性じゃないよ！？ 同性だよ！？」 巡が声を上げたが歯牙にもかけない。

「美道、あなたも何か言つてやつなさいよ」

そう言つて花奈は前の席の美道に振る。

彼はなにやら熱心にメールを打つていた。名前を呼ばると体だけ横に向けて、なおも目線の先は携帯。

「なんだい、ボクは今忙しいんだ… … いいじゃないか別に。ボク

はその気になれば巡の家にはいつでも行けるしな。場所だって知ってる」

「……なんで知ってるの？ 来たことないし教えた事もないよね？」

「友達の家ぐらい知つてておかしくはないだろ？？」

「……僕美道くんの携帯番号すら知らないんだけど」

「ボクは巡の番号とアドレスも知ってるぞ」

「だからなんで知ってるの！」

「なぜ？ ……知らない方がいい」と世の中にはあるんだ巡

「そうだとしても、こんな身近に謎をかかえたくないよ。……」

また一層げんなりしたといひで、花奈が呆れたように言つ。

「まあいいわ。残念だけど私もそんなヒマじやないからどの道今日はお別れだし。巡ちゃん、押し倒されそうになつたら大声で人を呼ぶのよ」

「うん、それはもちろん」

「いくら集まろうが魔法で返り討ひしちゃつけどね」

「怖いよ！ 朗らかに言わないで！」

「うそうそ。ジョーダンだよ」

巡はふと学校を灰にじようとした朝のメルを思い出し、身をすべませた。

……いや、あれもきっと「冗談だつたんだよ。途中まで呪文唱えかけてたけど。

今度も「冗談だといいなあ……。

結局巡はメルを自宅に連れて行くことになった。

両親の同意を得るためというかなり怪しいメルの言い分だつたが、それでも従つてしまふぐらいに巡は追い詰められていた。

自宅へはまず学校から歩いて駅へ。

三駅ほど電車に揺られたのちさらに徒歩十五分程度という道のり。途中バスを使うこともできるが節約のため基本的には乗らない。巡が高校に通いだしてそろそろ半年。

中学時代よりずいぶん長くなつた通学時間にもさすがに慣れてきたが、今回ほど家までの距離を長く感じたことはなかつた。

学校を出て電車にも乗らないうちに「疲れたあー、もう歩けない。休憩しよう?」「『休憩五千円だよほら!』などと大声で口走るメルに神経を削らされる。

他人のフリで先を急ぐも、逃がさんとばかりに腕にしがみついて胸を押し付けては、周囲にわざとらしい恋人アピールをかけない。道中携帯を盗られて勝手にアドレスを登録させられたり、夏も終わりだというのに突然「そうだ、めぐるちゃん水着買わなくちゃ」だとか言い出したり、否定すれば「あ、めぐるちゃんのブラ買わないと。でもめぐるちゃん貧乳だからしなくてもいいか。むしろしないほうがいいよね」とセクハラ発言を繰り返したりで、巡は早くもうんざりしていた。

電車に乗つてからも、ガラガラの車内にがっかりするメルによつて満員電車の妄想を垂れ流されたりで休む間もなかつた。

はたから見ればはつとするような美男美女カップルなのだが本当は美少女カップルだが 明らかに男子生徒のほうは腰が引けていた。

それはどこかおかしな光景ではあったが、細かい事情を通りすがりの人々が知る由もなく。

やつとのじで自宅　といつても賃貸マンション　に到着する頃には巡の体はふらふらになっていた。

かたやさんざん疲れただのわめいていたメルの足取りは軽い。しかしマンションが見え始めたぐらいから急に口数が減つておとなしくなった。

階段を登り二階の部屋の前まで来ると、

「なんか緊張するね~」

そんなガラにもないセリフを口にした。

メルの妙な態度を勘繰りつつも、鍵を開けて自宅に入る。われ先にと上がりこまれるかと思つたが、メルはおとなしく立ち止まつたままだった。

そのまま扉を閉めてしまいたい衝動にかられたが、魔法でぶち壊されたらたまらないので声をかける。

「……メルちゃん、どうしたの？ 上がらないの？」

「あ、うん。……めぐるちゃんの家、誰もいないの？」

「いや、たぶん父さんがいると思つたけど……」

それを聞いたメルの表情が、さらに引き締まつたよつに感じた。さすがの巡も彼女の様子がどこかおかしい事に気づく。さつきからなんだろう？ 誰もいなかつたら襲い掛かる魂胆だつたのだろうか。もしくは父さんを瞬殺して……。

にしてもそんな殺氣は感じない。どちらかといつと氣後れしているよつな？

……緊張してる？ またか。あのメルちゃんに限つてそれは……。

巡はそんな事を考えながらメールを招き入れてリビングに進む。メールはぽつりと「おじゃまします」と言つたきり無言で後をついてくる。

「巡、帰ったか」

リビングに荷物を下ろしたところで、スーツを着た男性が奥の部屋からのそりと姿を現した。

彼は巡の父、東西駢。とうざいにかかる三十六歳。

一見ひょろりと背せが高くなりつとした目元が印象的な優男だ。だが伸び放題の無精ひげとボサボサの髪の毛が著しくマイナスになってしまっている。

その上身に着けたスーツは上着がとこねどり汚れていて、シャツはしわだらけ、ネクタイはよれよれで変な縛り方。

不調な栄養不足なのかやや体の血色が悪い。フォーマルな服装をしているくせにやたら小汚かつた。

「うん？ そつちの子は？」

「あ、この子は今日転校してきた……」

「巡、どこにそんな金があつたんだ？ 父さん今日だつてカツブ麺を一人さみしくすすつていたというのに」

「違うよー。別にお金でどうこうしたつてわけじゃないよー。」

駢はなおも疑いのまなざしを向けてくる。

巡が女の子を家に連れてくることなんて今まで一度もなかつたため、そんな態度になるのも無理からぬ事だった。

「あ、あの。お邪魔しています。は、はじめまして、わたし潮見夢

「留つてここまか」

珍しくおじおどしながら血几紹介をするメル。

いつもの調子で「メルちゃんでえーっす！」とかやるかと思つたけど、意外や意外。

「うか。なんだかんだいって男の子の家に来るつてことで緊張してたんだな。その上親にもあいさつするわけだし。

メルちゃんもやつぱり普通の女の子っぽいところあるんだな。などと巡が思つたのもつかの間。

メルは意を決したように駈を見上げると、

「お父さん、めぐるわいやんをわたしに下せこー。」

「ちよつと待つたー。」

いきなりお父さんへの「挨拶」を始めた。完全に不意をつかれた一撃だったが、巡は素晴らしく速さで反応した。

「お願いだから脈絡なく求婚しないでくれるー？ 自分でもとつたにつつこめてビックリしたけどやつぱり僕、心の奥ではメルちゃんのこと疑つてたー。やっぱ正解だつたよー。」

「ふう、言つちゃつた。メルちゃんすつ」「こぞれぞれしたよー。」

「言つだけ言つて満足しないでよー。どうしてくれんのこの変な空

「氣ー。」

駈は「……ほひ」と言つたきり品定めをするよりメルを見つめていたが、にやつとわずかに微笑んだ。
かなり悪い顔だったのを巡は見逃さなかつた。

「巡、いつのまは普通男のお前が言つもんだぞ？」

「いやこれは違うよ、全然、ただの『冗談だから』」「めぐるちゃんをどうかわたしにつ……」

「メルちゃんつるやー！」

「え～と夢留ちゃんだったかな。とつあえず俺のことはパパと呼んでくれ

「はー！ パパ！」

「ふざけないでよー一人ともー！」

巡の嫌な予感は的中した。メルを連れてきた事をいまさら後悔しても、すでに後の祭りだ。

やつぱりこうなつたか……。

親の同意が必要だつていうんなら別に電話とかでもよかつたんじや？

それによく考えたらメルちゃんを連れて来る必要性だつてなかつたような……。

なんてバカなんだ僕は。

……どうせこれもみんな僕の家に来る口実であつて、全部ウソなんだろう。

「おい巡。どんなあくびい手を使つたのか知らんが、お前みたいなお間抜け男を好きになつてくれる子なんてそつはいないぞ？『冗談だとしても今のうちに既成事実を作つてしまえば……』

「大丈夫です！ わたしたちもうやりまくりですから！」

「なに大嘘を高らかに宣言してゐるんだよー。さつきまでの態度はなんだつたのー？ それにウソだからうつていつてももつちよつとオブラーートに包もうよー！」

巡はしつこく釘を刺すようしつこみをいれる。

急に絶好調になつたメルが、どんな爆弾発言をするか気が気がでないからだ。

「こしてもこんなに可愛い子が…………ん？…………お前。お前誰だ！？」

自分を見上げる顔に違和感を覚えたのか、駢は巡の顔を凝視した。巡は実の親に改めてじろじろ見つめられると、恥ずかしくなつて顔をそむける。

駢はさすがに巡の変化に気が付いたようだ。

「パパ、めぐるちゃんは今日から女の子になつたんだよ」

「女？…………こりらパパをからかうのはよしなさい」

「……と、父さん。本当に、そつなんだ……」

「お前まで何を馬鹿な……」

「ダンナ、この際もう脱がしちまいましょーー。そいつが手っ取り早いですぜ！」

「ちょっとなに言つてんのメルちゃんー！」

「むう…………し、仕方ない。わ、悪ふざけに付きましたとするか。…………む、なぜか緊張する」

駢は巡の制服を脱がせにかかる。近づいてブレザーに手をかけたところでの、巡は身をよじつて激しく抵抗した。

いつも華奢になつた体格にはやや大きいサイズの衣服がはだけ、すべすべの白い肌に浮き出る鎖骨と肩が半分露出する。

「わあっ、やめてー…………ほんとこー！」

「脱一がーせつー…………脱一がーせつー！」メルが周りではじ立てる。

「おかしいな……。息子に俺のムスコがかすかに反応している。それで妙に色っぽい」

「ちょっと、気持ち悪いこと言わないでよ！だから、なんかよくわからない魔法の力でこいつなつちやつたんだよ！」

「……魔法？ 魔法だと？…………」「ーん、そりか、なるほど……」

…

「えっ！ すんなり納得するのー？ 魔法だよ、疑わないのー？」

「うーむ…………ついにお前にも話す時がきたか…………」

駆は巡から手を放すと、少し考へるようなそぶりをしたのち真顔で話しだした。

「巡。心して聞け。何を隠さずお前の母さんば、その昔魔法少女だったのだ！」

「ええっ！？」

こきなりの衝撃事実に驚きを隠せない巡。

「…………この前はキャツツアイだったとか言つてなかつた？」

「すまん、あれはウソだ」

「うん、まあ全然信じてなかつたから別にいいけど…………」

普通なら今度も「冗談で流すところだが、巡は現に魔法少女が実在する事を知っている。

すぐ隣で「おっ、もひひょっとだつたのに」と悪態をつく変態が、一般的な魔法少女と呼べる代物なのかはさておき。

「わたし知ってるよ。東西南。^{ひがしにしみなみ}めぐるちゃんのママだよね？」

「えっ？ なんで母さんの名前を……」

「だってすつごい有名人だよ？ 伝説の魔法使い少女。昔お兄ちや

んがとつても可愛がつてたんだけビ、ビージャの馬の骨に寝取られたつて言つてた

「馬鹿な。南は処女だつたぞ」

「お兄ちゃんは今も童貞だからね。南は子供を孕ませられて生まれた後、すっかり魔法力をなくしちやつたつて悔しがつてたよ」

「……まあ事実ではあるが、ずいぶん悪意のある言い方だな……。
ちゃんと恋愛して、同意の上だぞ？」……お兄ちゃんつてもしかして道程のことか？
たかむらみちのじ
高村道程「

「えへつと……多分そんな名前だつたよつな氣がする」

「やつぱりまだ根に持つてんのかあの人は……。それにお兄ちゃんなんて呼ばせてしようもない」

……自分だつてパパとか呼ばせてるくせに。

巡はそう言いたくなつたが、黙つて一人の会話に聞き入つていた。全てが初耳であつたが、どちらもウソを言つている様子はない。いつなつてはさすがに信じざるを得なくなつてきていた。

メルは巡に向き直り、まっすぐな視線を向けながら言った。

「だからわたしがめぐるちゃんにいつも惹かれたのも、きっと南さんから引き継がれためぐるちゃんの中に眠る魔法の力を感じ取つたからなんだよ」

「魔法の力……」

「……ねえ、覚えてる？　わたしたち一人が出会つたときのこと」「そりや覚えてるよ……。今日の朝だしね……。遠い昔を回想するように言わないでよ」

「そう、めぐるちゃんがねつとりとからみつくようないやらしい日つきでわたしのパンツをガン見した時のこと」

「そんな日つきしてないよ！　あれは偶然見えちゃつたんだって！」「でもいいのそんなこと。今となつてはあの時パンツなんていってなければよかつたなつて思つてるぐらいだから」

「ダメ。ちゃんとはいて。毎日かかさず」

「とにかく、めぐるちゃんを見た瞬間、体に電流が走つたの。オーガズムに達したの」

「一言多いよ……」

「わたしたちが運命的な出会いを果たしたのも、きっと魔法力がありをがひきつけたんだよ」

「なんか無理やり美化しようとしてない？」

「それに答案用紙に東西つて名前があつて、確信したの。珍しい名前だし。そうじやなければ見ず知らずの人にいきなり呪いなんてかけないよ」

「また呪いつて言った！　そりやつて正当化しようとして！　僕、

この恨みはたぶん一生忘れないと思う」

「だからめぐるちゃんの体だけが田端でじやないんだよ？　そう、

「これは魔法と云う名の恋の力に引き寄せられた結果」「なんかつまること言つてゐるようだけど、体だけがつて」とせまりあえず体田面對ではあるんだね……」「……

その時、何か考え込むようにしていた駆が口を開いた。

「巡は魔法で女になつた。うん、それはわかつた。なにせ親の俺から見てもムラムラするぐらいだからな」

「ちょっと… 気持り悪いんだけど…」

「そこでだ。その姿を利用しない手はない。父さん素晴らしげアイデアが浮かんだぞ。つまりその…… AVを作りうかと思いつたんだが」

「いきなり話が飛躍してゐよ… そんなのどうかよそで勝手にやつてよ…」

「そうか、巡、協力してくれるか!」

「なんで僕が！ するわけないでしょ…」

「いやこの際イメージビデオでもいいんだ！ いけるぞお前なら…」

「はい！ わたし、精一杯頑張ります！」

「メルちゃんなんにいい返事してるの…」

「監督、提案があります！ わたしとめぐるちゃんが一人で絡み合

うところのはどうでしよう！」

「おおっ… それは願つてもない！ 父さん想像しただけでガッチガチだ！ いやビンビンだ！」

「最悪だよもうほんとに…」

「わたしも想像しただけでおシコが…じゅぬつ」

「メルちゃんよだれ！ よだれふいて…」

「めぐるちゃんふいてつ！ ついでに下のお口も…」

「自分でふけ…」

「よ～し、タイトルは『女ざかりの君たちへ～レズビアンパラダイ

ス♪』で決まりだな

「怒られるよ！訴えられても知らないよ！？」

「なにを、元は俺の精子の分際で生意氣な」

その言葉にカチンときた駄は、駄の弱点を突いて反撃した。

「父ちゃん… ぐだらないことばかり言つてないで、せつせとまともな仕事についてよ！」

「いま、とこりかこ一一年ほど駄は無職だった。
自営業だ、仕事中だ、と言い張つてはこうして家でもスーツを着
ている。

フランチといなくなつては毎日も帰らなかつたり、家にいると思え
ばたいていパソコンに向かつてネットがゲームばかりしているだけ
だ。

本人いわく金を稼ぐための情報収集だそうだ。

この前はうさんくさい栄養剤の販売に手を染めていたようだが、
さっぱり売れず今も押入れに在庫が残つている。

もう飽きたらしい。

というかただのマルチだつた。

「案ずるな巡。いま俺はバーチャルな空間で『>//モード』を結成し、
リーダーとして次々とプロジェクトを立ち上げてはハードなスケジ
ュールをこなしているんだ」

「それネットゲームの話じゃん！ 横文字で『まかしても無駄だよ
！ 最初にバーチャルって言つちやつてるし…』

「だが父ちゃんウソは言つてないぞ。むつウソは『じりだからな

数年前駄は会社をクビになつたにもかかわらず、半年ほどエア出
勤を繰り返していた。

だがある日漫画喫茶から出でてくるところを南の知人に目撃され、ついにそれは発覚した。

そしてその夜、容赦ない拷問が行われた。

駢はあらかじめ用意していたウソで巧妙にごまかしていたが、南が本気を出すとすぐに口を割つた。

それはもう恐ろしい拷問だったという。一人の寝室には今でも時おり血痕が見つかるそうな。

だが翌日から開き直つた駢は、とたんに生き生きとした。もう朝からビクビクと席のない会社にいくふりをしなくてよくなったからだ。

駢は就職活動をするふりをしつつ、やつぱりこれからは自営業だといいつつ、その実好き勝手に遊んでいた。

その態度がついに南の逆鱗に触れたのだ。

ほんの一月ほど前、南はなぜか下の子である巡の妹、東西環とうざいのこだけを連れ実家に帰つて行つたのだった。

「父ちゃんがそんなんだから母さんが愛想つかして出て行つたんだよ?
…………そのつえ環まで」

恨みを込めてやうつぶやく。

そう口にすると、巡の中に強に悲しみの感情がこみ上げて来た。

「やうだつたな……すまん巡、父ちゃん悪いと思つてる。だがその話
なんだが……」

巡がいつになく悲しそうな表情をしたのを見て取ったのか、駄も
真剣な顔になる。

一気に室内がシリアルスな雰囲気に包まれた。

「たまき? ……めぐるちゃん誰なのその女

しかしそんな空氣を読めない人物が一人いた。メルだ。
正確にはそんなことお構いなしといったところか。

彼女の、ギラつと鋭い視線が巡につきささる。そして巡の一の腕に
メルの手がメリメリと食い込んだ。

華奢な細腕からは考えられないような握力だった。

「い、痛いって、放してよ! 環はただの妹だよ! 四つ手の!」

「妹? ……あやしい」

「いやそこは『なーんだ妹か』つて終わるとひりどしょー!」

「夢留ちゃん鋭い。巡は環が可愛くて可愛くてしょづがないんだよ

な」

「い、いやべつに? そんなこと、な、なによ?」

つられたえる巡。口では否定をしているものの、隠し事が下手な彼の拳動は明らかに不審だった。

メルは掴んだ腕を放さずさらばに追及する。

「だつて妹つて……。実の妹なんでしょ？」

「そうだよ。ちゃんと血の繋がりだつてあるよ」

「やつぱりあやしい！」

「だからなんで!? 安心していことこのでしょ! ?」

「義妹なんて生ねるこのは認めない! めぐるちやんだつてそういうでしょ! ?」

「僕に同意を求めないでよ! そもそも言つての意味がわからないし!」

「……ひょっとメルちゃん出かけてくるね。急用がでかけやつた」

ナツ言つて巡を解放すると、わざわざ部屋を出て行ひとする。

「待つて! この流れでどこに行くつてのさー?」

「パパあ、たまきちゃんつて今どこにいるのかなあ?」

「父さん教えちゃダメ!」

巡は叫んだ。メルの凶行を阻止すべく。

もしメルちゃんに環が狙われたら……。何をされるかわかつたもんじやない!

最悪変わり果てた姿に……弟として再会するなんてことになるかも!

「うん、その事なんだが……」

「だからダメだつて!」

巡の危機迫る表情を不思議そつに見つめて、駄は言こよどむ。

メルは直接聞き出すのをあきらめたのか、座り込んでカーペット

の上をじーっと見つめだす。

そして両手と膝をつくと何かを探すように首を振りながらはいざりだした、

その奇妙な行動に、巡は思わず尋ねる。

「な、何してるの？」

「……髪の毛とか落ちないかな～って。たまきちゃんの」

「お、落ちてないって。もう出て行って結構たつし、この前掃除だつてしまし。……だ、だいたいそんなの見つけてどうするの？」

「もちろんあらゆる魔法を駆使して髪の毛から居場所を突き止めるんだよ？ もう全魔法力をつき込むんだから」

「そんなことに全魔法力つき込まないでよ！ それに居場所を知つてどうするつもり！？」

メルはその質問には答えず、無言で捜索を続ける。

そんな姿に軽く恐怖を覚えた巡は、それ以上声をかける事をためらつた。

一方駄はいつの間にか用意したカメラで、彼もまた無言のままメルのお尻を追っていた。

室内は一人がじそじそと動き回る音だけ。全員が沈黙のまま異様な光景が続いた。

やがて一通り徘徊し終わつたメルが立ち上がり、額を拭つしぐさをする。

「ふ～、やつぱりないなあ。でもめぐるちゃんの陰毛らしき物を発見しちやつた。リビングでオニーするなんて開放的なんだからもう」

「えつ？ ほ、僕、ここでなんてしないよー！」

「じゃあこいつもビニでしてるのかなあ？」

「ど、どうでもいいでしょそんなの！」

「最近はもうぱらリビングだな」

「ちよつと勘弁してよ父さん！」

「ちよつと勘弁してよ父さん！」

堂々と盗撮行為を働いていた駢が胸を張つて言つた。
と、その時何かを思いついたようにメルが声を上げる。

「あ、そうだ！ めぐるちゃん、たまきちゃんのはじたパンツとか
隠し持つてるでしょ？ 出して」

「持つてないよ！ なにその当然持つてるみたいな言い方！・

「なに？ 見せてみる巡。父さんが鑑定してやる！」

「だから持つてないって！ ていうか鑑定できるの…？ すうい職

人芸！」

「めぐるちゃん、どうこ隠してたの？ 早く出してくれ。……あ、せつ
か。今はいるんだよね？」

「そんなわけないでしょ！ そんなに僕を変態に仕立てあげたいの
！？」

「『ゴチャヤ』『ゴチャ』言つてないでさつわと脱いで… ほらー。」

巡の下半身にかじりつくメル。

あきらかにズボンもひとともパンツまでずつてひたすら怪力に、
必死で抵抗する巡。

駢はその様子を再び構えたカメラに収めていた。

「ちよ、ちよつと、やめてつてば… ……父さん… なに撮つてん
の… 助けてよ…」

「レズビアン男装逆レ プ…。ここつは前衛的すぎるぜ… ……、新
時代の幕開けだ！」

「バカなこと言つてないで早く助けて！ メ、メルちゃん、もうア

ランクス見えてるでしょ！ 女物のパンツなんてはいてないって！」

「監督！ こんな感じですか？ わ、わたしこんなことした経験ないから、ちゃんとできてるか不安ですっ」

「自信なさそりだけじす！」と上手だよメルちゃん！ 今朝も似たようなことしたよね！？ すつごに慣れた手つきだつたけど！？」

「うんうん、いい感じだぞ夢留ちゃん。レズというかもはや痴女っぽい」

「やつたあ、ほめられちゃつた！ めぐるちゃんもほら、もつと対抗心を燃やして……」

「そんなのに乗っかるわけないでしょ！ そりやメルちゃんにひとつは褒め言葉かもしれないけど！ ていうか、なんでこんな流れに……」

巡は脱がされまいとふんばりながら、そう呻いた。

だが彼の奮闘むなしく、さらに力強くなつたメルの腕力にずるずるとズボンが下ろされていく。

こままさに巡の直操は絶体絶命の危機に瀕していた。

「メ、メルちゃん！ ほんとにやめて！ しゃれにならないって！」「めぐるちゃんものつてきたね！ でももう嫌がる演技はこのぐらいでいいから次に行こ？」
「演技じゃないって！ それに次つてなにさー？」

メルの力がいつそ強く込められ、ついに巡の腕力も限界が近づき陥落寸前になる。

止まらない暴走に、巡は心からこれ以上ない危機を感じた。
……「こ、こんな、これを脱がされたら一体どんな事に……。どうにか、どうにかしないと！」

なんとかしてメルを引き剥がさないと、と巡が強く念じたその瞬間。

腰元にまとわりついていた変態女は、なにかに強烈な衝撃を受けたように吹っ飛ばされた。
そしてゴズッ！ とテーブルの角にメルの後頭部が直撃するにぶい音が響いた。

「……え？」

何が起きたのかわからず啞然とする巡。カメラをまわしていた駄馬も同様だった。

当然メルが自分から後方へジャンプしてテーブルに後頭部で頭突きをかますなどという意味不明な行動に出たわけではない。不自然に吹き飛んだメルを見て、二人は彼女がなにか目に見えない力によってそうなったのだと思わざるを得なかつた。

「う、うん……」

メルが後頭部をさすりながら上半身を起こす。

「……メルちゃん、だ、大丈夫？ わつきものす」に音がしたけど」

「あれ、わたし……。そつか、夢だつたんだ」「なにが？」

「めぐるちゃんとエツチなビデオを撮影するつていつ」「夢じやないよ！ 無理やり襲い掛かってきたでしょ！」

「めぐるちゃんが激しく求めてきて、わたしちょつと困つちやつてて」

「「めんやつぱそれ夢だよ」

「そしたら大型トラックが横からつづりんできて」

「どこでなにやつてたのそれ！？ 明らかに野外だよね！？」

「全裸のめぐるちゃんをわたしがかばつて、それで……」

「かばわなくてよかつたよ。路上で全裸のやつなんていつそひき殺されたらしいんだ」

「あ、わたしも全裸だつたんだけど」

「トラックの運転手さんいい仕事した！」

「わたしすごい衝撃で跳ね飛ばされたんだけど……めぐるちゃん無事だつたんだね。よかつた。……じゃあつづき、しょつか」

「しないよ！ だからそれは夢だつて！ 恐ろしい悪夢だよほんとに！」

なんらかの衝撃で跳ね飛ばされ後頭部をしたたかに打つたはずのメルだが、何事もなかつたかのようにすくと立ち上がった。さすがに駆が驚いて声をかける。

「夢留ちゃん、大丈夫なのかい？ いちおう病院行つたほうがいい。

なんか知らんがす」いふつ飛び方だつたぞ」

「全然だいじょうぶだよ。メルちゃんこう見えて頑丈だから」

「いや、メルちゃん、やっぱり診てもらつたほうがいいよ。他にも

いろいろと」

「なんか言つた？」

「いえ」

あれだけのダメージをうけてけりうとしているメルに戦慄を覚えつつも、巡は首をひねつた。

「にしてもさつきのはなんだったんだろう……」

「なになに？ どうしたの？」

「いや、僕の服を脱がそうとしていたメルちゃんがいきなり吹き飛ばされて」

「……あ、な～るほど。さつきの衝撃はきっと魔法だね。つわべは脱がされたくない力と本当は脱がされたくて仕方ない力の相互作用で、めぐるちやんの魔法力が爆発したんだよー。」

「せうせうともうともうしくウソ言わないでくれるー。？」

「どうやらメルをじうにかしたいと巡が強く念じた時、魔法によつて衝撃波のようなものが発生したようだ。」

巡は自分で魔法を使つたという実感がなかつたため半信半疑だつたが、それ以外に説明がつかなかつた。

受けたメル本人が言うのだから間違いない。

駄は「なんだ魔法か。ならそう驚く事はないな」と余裕をかましていた。

彼は昔、妻である南が起こす魔法を田の当たりにしていたのである、理解も早かつた。

結局魔法を使った巡本人が一番腑に落ちない状態だつた。

「……なんかもう今日は疲れたよ。メルちゃん、当初の田的は果たしてでしょ？ お願いだからもう帰つてよ」

「えつ、当初の田的は親の同意をもらつた事でしょ？」

「メルちゃん別の同意をもらおうとしたでしょ……。あと男に戻るのに同意が必要とかウソだしちゃうか」

「あつ、バレた？ やだめぐれやつたら、やつと知りつつ泳がせてたの？」

悪びれずにわうわうメルにあきれ顔の巡。そんな顔に駄が真面目な口調で語りだす。

「といひで巡。ゆれんと環のひとなんだが、この際だから本当の事を言おうと懇意」

ああ、次は一体なんなんだ駄、と今度せつぞせつした顔で巡は駄を見上げた。

「実はな……母さんは環を連れて出て行つたのには別の理由がある」「えつ！ 働かなくてお金がなくなつて家賃もきつくなつてご飯も満足に食べられないといつのにやつぱり何かわけのわからないことばかりしてる父さんにいに加減嫌気がさして出て行つたんじゃないの？」

「お、おひ。早口でこいつぱこ言つてくれたがそれは違うんだ」「じゅあなに？」

「お前には内緒だつたんだが、実は環を国際魔法研究専門学校お兄ちゃんだいすき科に入学させるため、別居を余儀なくされたのだ」「なにその怪しい学校！ 絶対勉強とかするとこじゅじやないでしょ！」

「バカ、落ち着け。……いいか、こじゅは南もその昔通つていた由緒あるれつきとした教育機関だ」

「ほんとに？ ……てこいつか母さんそんなんとこり行つてたの？ 初耳なんだけど」

真面目な話になるかと思ひきや案外そつでもなさかつた雰囲氣になつたところ、メルが横から口を挟む。

「めぐるちゃん、何を隠そうわたしも国際魔法研究専門学校お兄ちゃんだいすき科、通称まほ学の卒業生なんだよ」

「えつ！？」

「そこで、どのぐらいだつたかなあ、二年ぐらい通つたかなあ？」「魔法学校つて言つてたの、そのことだつたのか」

「ほら見ろ巡。夢留ちゃんも通つてたのはビックリだが、これで安心したる」

「逆にめぐるくちゅ不安になつたんだけど……」

「その時一緒にクリちゃんだったと花奈が言っていた。あやしいが実在する学校である事は間違いないのだろう。

しかし巡は変態を輩出すするような学校へ妹を預ける事にかなり抵抗を感じていた。

それにどうにもおかしい点がいくつもある。

「父さん、ちょっと待って？ なら別居しなくていいからそのまま学校に通えればいいじゃん」

「ああ、学校は全寮制らしいぞ」

「なら母さんは？」

「ああ、うん」

「……『ああ、うん』じゃないよー。やっぱり出て行ったんじゃないのか！」

「子供には複雑な事情はわかるまい」

「どうせさつき僕が言つたとおりの事情でしょうが」

「いや、他にも隠していた借金が見つかったとかいろいろあるんだ」

「ええ！？ なにそれ！？ いくりーー？」

「まあまあ落ち着け」

いきり立つ巡をなだめる駄。

掴みかかるとは行かないまでも、田代から節約を強いられている巡には衝撃の事実だった。

それでも楽観的な父親に怒りを通り越してしまった巡は、気力を失いつつも残る疑問を口にした。

「……大体そこに環が入学する事に何の意味があるのかさっぱりわからないんだけど」

「まあ聞いて驚け。試験にパスして入学が決まればお祝い金として、一千万ももらえるそうだ」

「なんでもらえるの！？ 払うんじゃなくて…？ やつぱり金だよ！ なんか身売りみたくなつてるじゃん！」

「わたしの時ももつたみたいだけど、ママがお金管理してるからよく知らないなあ」

「ほ、ほんとに…？」

「卒業の時には三億ぐらこもらつたらしきナビ」

「額でかつ！ メルカリもしかしてその代償としてそんな風に…」

「え？ どんな風に？ わたしそんなに変わつてないと想ひナビ」

あつ、と巡は口をつぐむ。

……そうか、生まれつきかわいそうな子だつたんだな。
いや、それ上ひらに拍車がかかつたのかもしれない。

「やつぱり座しづかれる……。心配だ」

「最初は父さんも反対したんだがな、『なら働いて金入れなきよこのクズ！』と罵られてしまい泣く泣く従つたのだ」

「……普通に働けばいいんじゃないの？ ていうか働け」

「だがもう遅い。もうきっと入学も決まつているはずだ。なんの音沙汰もないが。泣き付いてどうにか九・一で一千万を分ける約束をしたのに」

「情けないなあ……。それもう絶対無視されてるんだよ」「だがお前にも連絡ないだろ」

「……でも僕には秘密だったんでしょ？」

「なあ、もし母さんから連絡きてお前に直接金を渡すようだつたら、わちと父さんに報告するんだぞ」

母が出て行つた後、実は巡の携帯には幾度となく連絡があつた。

そのうち父には内緒で少しばかり生活費をもらつ予定だったが、魔法学校うんぬんは一言も聞かされてなかつたので隠すつもりだったのだろう。

じりじりせよ點のためにこゝはお金を渡さない方がいいと考えた巡は、そのことは黙つておく事にした。

「ああて、たまきちゅんの居所もわかつたし、わたしあのへんでつまらなさそりに話を聞いていたメルが、そりゃうてそりと出て行こうとする。

しかし巡回ター＝ネーターをこのまま行かせまこと後ろから腕を掴んだ。

「待った。……それで環をビリするつもり？」

「ふふ。やだなあ、そんな、妹と認識できぬいぐらい顔を変形させるとかやらないよ」

「当たり前だよ！ そういう発想ができる事自体危険すぎー。」

「ちょっと顔を確認するだけだよ。わたしにとつても妹になるわけだから」

「いやならないでしょー。」

「え？ なるよね？」

「真顔で聞き返さないでよ！ ……じゃあさ、僕もその学校連れてつてくれないかな。お兄ちゃんって人もそこにいるんでしょ？」

「べつにいいけど、お兄ちゃんに会つたどこで何するの？」

「だからー。その人に僕が男に戻れるよう頼むつて話だつたでしょー！」

「あっ、そつかあー、わつすれてたあー。『めくん』

「今どぼけようとしてたよね……」

言動がおぼつかないメルをたしなめると、なんだかんだで結局これから魔法学校へ向かう事になった。

なんだか面白そだと駄も行く気になっていたが、ウザいし一緒にいるところを外で見られたくないのでスルーし巡回メルはマンシ

ヨンを出た。

路上に出た一人を沈みかけの夕日が照らす。帰りが遅くなると夜になつてしまふなと思つたところで、どうやらどこで行くのか、そもそもその学校がどこにあるのか全く知らないことに気づいた。

「メルちゃん。ところでなにで行くの？ 場所どのはん？ 僕お金ないからタクシーとかは……」

「心配」無用。あつといつ間に着くよ」

巡の質問をさえぎつてメルは自信満々に言つ。

彼女はいつの間にか自分の背丈よりやや短めの棒状のもの、例えて言つならトイレの詰まりをスッポンスッポンやつて解消する時に使うアレのようなものを手にしていた。

結構な長さだが、メルは手なれた様子で扱う。

銀色に光沢を放つそれは、妙に高級感が漂つていた。

「……えーと、なに、それ

「これ？ ホウキのリリちゃんだよ？」

「……ホウキ？ その大きな吸盤みたいな先端、どう見てもはき掃除できないよね？ それになんかわいい名前つけてるみたいだけどすじい鉄っぽくて無機質なんだけど」

「まえはちゃんとした竹ボウキだったんだけど、ちょっと激しい使い方したらボキッていつちやつて。頑丈に改造してもらつたの」

「一体どんな使い方したの……？」

「え？ それは……やだ、恥ずかしい」

そう言つてお茶を濁すとメルはリリちゃんとやらこまたがる。わざとらしく足を上げてパンチラし、巡の反応をつかがうのも忘れない。

「ほら、めぐるちゃんも早くひしるこまたがつて」

「……ねえ、まさかそれで空を飛んでいくつて言ひつもり？」

「そりだよ？」

「ほ、本当にそれ飛ぶの？ なんか頼りないし、風圧とかで振り落とされそうな予感がするんだけど」

「大丈夫だよ。抵抗調整に重力制御機能だつてあるし。いちおう魔法でもカバーするし」

「よくわからないけど大丈夫なのかな……。怖いなあ」

いまいちメルを信用しきれていない巡は不安を隠せない。だがいかがわしい物体にまたがつていかがわしい事をしようとしている姿を通行人に見られたら嫌なので、仕方なく言うとおりにすることにした。

おそるおそるメルの後ろのスペースにまたがる。

「……なんかこの棒といじるといじる突起があるんだけどこれ何？」
「じゃあいつくよ～！ リリちゃんゴー！」

投げかけられた疑問を無視し合図をかけるメル。

その瞬間、ふわりと体が持ち上がり二人の体が宙に浮いた。

「おわっ、すごいー ホントに浮いてるよー！」

「えへへっ、すごいでしょ！ でもリリちゃんの力はこんなもんじやないんだから」

メルがそういった途端、ホウキが小刻みに震えだした。ブルルルルと体と棒の接着部分が振動する。

「ち、ち、ちよっとストップ！ な、なにこれ！」

「何つてバイブレーション機能だよ？ 突起をつまみ使ってね……」

「あんっ！」

「止めて止めて！ ダメだつてこれ！ ああっ！」

「恥ずかしいで声だしていいよ？ ほら！ ちょっと乱暴にしても今度はそう簡単に折れたりしないから！」

「こ、これのせいで折ったの！？ ……つてもういいから！ 早く、ストップ！」

何度も大声で催促することでやっと振動は止まった。

ホウキ全体をパワー OFF にしたようでは、二人とも浮き上がる力を失いゆっくりと地に足が着く。

後ろを振り返りながらメールが残念そうに言つ。

「もう、これが一番すげーに機能なのに……。めぐるちゃんには刺激が強すぎたかな？」

「いつもこんなに乗つてるの……？」

「つまりそれってわたしにオーネーの頻度を聞いてること？ めぐるちゃんいやらしい」

「どうでもいいけどさ、こんなの乗つてたら公然わいせつとかそんなにひつかかりそうじゃない？ それに未確認飛行物体とかなんとかで騒がれるんじゃないの？」

「大丈夫。ステルス機能付きだから、飛んでる時とか一般の人には見えないよ」

「そっちの方がバイブレーション機能より絶対すごいよね……」

「そんなことないよ、だって強弱調整できるんだよ？ あとすごいのがオート機能つていって……」

「もういいから早く行こう！」

「早くイキたいの？ ジャあフルパワーで」

「バイブはもういいから！」

再びホウキが浮き上がり、今度は振動することなく一気に高度を上げた。

数分後。

異常なまでの猛スピードで上空を駆け抜けたホウキは、初めてのフライトに感動する間もなくあつといつ間に一人を目的地へ運んでいた。

メルが振動のないホウキにダラダラ乗っていても仕方ないといって、フルパワーでとばしたせいだった。

「どうちやーく！」

繁華街から少し外れたとある一角に一人は降り立った。

周囲に人の通りがそれなりにあつたが、ステルス機能とやらが効いているのだろうか、誰も空から降りてきた巡達に驚いているものはいなかつた。

目前にはややさびれた雑居ビル。学校の姿など影も形もない。またもや気が付くとホウキをどこかにしまっていたメルは、不思議がる巡を尻目に意気揚々とビルに入つていく。

たまらず巡はメルを呼び止めた。

「ちょっと、メルちゃん！ 魔法学校は？ このビルに入るの？」
「いいからいいから。ついてきて」

メルはいつもの調子でそう言つが、こんな人がいるのかも怪しい建物にメルと二人で入るのは少し勇気がいった。

何が待ち受けているかわからない、というよりか単にメルがなにをするのかわかつたもんじやないので恐ろしいだけだが。

……まさかここでいかがわしいことをするつもりじゃ……？

だが例え罵だらうとメルに従わないことは話が進まない。他に自分が元に戻れるアテがあるわけではないのだ。

巡は警戒しながらメルの後をついていった。エレベーターで三階まで上がる。

一階や二階は何かの事務所になつていて、途中普通に人の姿が見えて少し安心した。

三階はドアが一つあるだけで他は白塗りの壁。この階は不思議に静かだった。

ドアの前でメルが立ち止まる。すぐ横についているインターホンにむかって声を発した。

「お兄ちゃんただいま。メルちゃんだよ」

そしてドアノブに手をかける。

「い、今何?」「

「会言葉だよ。あと声紋認識。ほら、いよいよお待ちかね」

メルは巡の手を強く握ると、もう片方の手でドアを押し開けた。一瞬見た室内は真っ白な空間だったが、すぐに手を引かれそこに飛び込む。

すると視界が全て白に包まれた。

「いやあ～おひさだよね～。メルちゃん

「ココと微笑むのはこかにも人の良さそうな男性。

年のころは三十後半ぐらいか。つやつやと血色のよい肌に、愛嬌

ある丸々とした瞳が特徴的だ。

やや小太りな体に、こぎれいな服を身に着けている。

彼こそがお兄ちゃんこと高村道程たかむらみちのぶその人らしい。

ここは道程の事務所兼自室。ゆうに巡の家族用マンションの一倍はありそうな間取りだ。

あのドアを開けた途端一気にこの高級スイートルームの一室のような場所にワープしたのだ。

豪華な絨毯が敷き詰められ、見るからに高そうな調度品が並ぶ。さきほどまでの巡の家とは別世界の空間。

だが天井や壁にところどころ貼られているアイドルやアニメのポスター、皿や壺などの装飾品に紛れて置いてある美少女フィギュアなどがいろいろ台無しについていた。

巡とメル、道程の三人は机をはさんでお互いソファにこしかけている。

光沢を放つ高級そうな長机の上で、三つのティーカップが湯気を立てていた。

ついさっきこの小型の中年男性がちょこまかと動き回り用意したものだ。

「いやいやほんと久しぶり

「……久しぶりだね」

「メルちゃん卒業した途端にふつつリメール」なくなつちやつたけど

ど

「うん、なんか急にめんどくさいなって」

「……え？ め、めんどう？」

「そ。だつてお兄ちゃんなんてわたしの生活の中でいっぱいいる知り合いの内的一人に過ぎないじゃない？」

巡は気まずそうにアニメのキャラクターがプリントされたカップを口に運ぶ。

「い、いやあ、でもうれしいもんだね。卒業生がこいつやつて会っこ
来てくれるって」

「別にお兄ちゃんに会こにきたわけじゃないんだけど?」

「……えつ?」

「……しょ、しょうがないからついでに様子見にきただけなんだか
ら」

「あ……、やう」

「ココだつた道程の歓迎ムードが一転、暗い雰囲気に包まれる。
メルもついたままでとはうつてかわり、沈んだ調子で話をあわ
せるだけ。

巡はどんなにたまれない気分になるも、嫌な予感がしたので
黙つて成り行きを見守つた。

しばらく沈黙が続いた後、急にメルが氣でも違つたように明るい
声を出した。

「な~んて、ウソだよつー ホントはお兄ちゃんのことだいすきだ
よ!」

「よお~し。メルちゃんよくできました。はい。おじづかこ」

「うわあ~い、お兄ちゃんだ~いすき!」

道程は懐から札を何枚か取り出し、メルに渡す。
巡はうげつ、と飲み物を吹き出しかけた。

嫌な予感が的中し、早くもこの場から消えたくなる。

一瞬ドヤ顔で道程がこちらに視線を向けてきたが、巡は机の上の
フイギュアとにらめつこしてビツにか流した。

「あ、そうだ。おいしいケーキあるから今持つてくれね」

上機嫌で道程が席を外した。ふふふ～ん、と謎の鼻歌がキモかつた。

すると隣でふつ、ヒメルが鼻で笑う。

「三万か……ちやろいもんだね」

明らかに小バカにした感じで小ちくわづつぶやいたのを巡は聞き逃さなかつた。

「めぐるちゃん。」それで今晚、付き合ってくれるよね？」

メルは今しがた受け取った三万円を巡の手に握らせながら言った。

「嫌だよ！ なにこのわかりやすいお金の流れ！」

「お金……ないんでしょ？ なら受け取って」

「うつ、なんて汚い……。メルちゃん君つて人は……。そんなの受け取れないって」

「…………うふふつ。ジョーダンだよ。そんな人の足元見てお金で買収なんてするわけないでしょ？ でもこのお金はあげる。使

うたびにメルちゃんの顔を思い出してくれればいいから」

「ものすごい恩着せようとしてない！？ あとちょっと舌打ちしな

かつた！？ どっちにしろそんな汚いお金受け取れないよ！」

「……汚いお金は受け取れない、か……。うん、そうだよね……。

さすがめぐるちゃん。わたし惚れ直しちゃった」

メルはうふつとうれしそうにはにかむ。

よけい高感度が上がってしまった。選択肢を間違えたようだ。見境なくお金に飛びついておけばよかつたと巡は少し後悔した。

その時道程が軽やかな足取りでトレーを運んできた。ケーキが乗つた皿をおのとの手前に差し出す。

ふんふふ～んと鼻歌が絶好調で、やはり上機嫌だった。

三人分のケーキを用意し終わると道程も着席する。

「ああ、食べて食べて。本当においしいんだから」

だがメルはケーキには手をつけず、代わりに先ほどの一円札を道程に差し出して言った。

「お兄ちゃん。 やっぱりこれ返すね」

「……えつ？」

一気に道程からせまでのつまつまムードが消えた。

先ほどまでの「口」の顔が一転、何が起きたかわからなこといった表情で固まる。

「び、び、びうしたのかな？　お、お兄ちゃんからのおじやかいだよ。　あつ！　も、もしかして少なかつた？」

「ひん、違うの」

「えつ？　あつ、えつと……。あつ！　これあれ？　またツン？」

「一段構え？」

田に見えて狼狽する道程。そんな彼を見て巡は少し哀れみを覚えていた。

「お金じや貰えないものがあるんだよ。そりやしあへ。めぐるひやん」

「僕にふりなこでよ……。別にそんなに深い意図があつたわけじゃないし……」

正直あまりこの一人と絡みたくないなので、巻き込まれたくない巡は適当にお茶を濁す。

「ね。お兄ちゃん、いつこのまよくなこよ。すぐにお金でびいりうじようなで」

「……メルちゃん、偉そうに元氣なカジケッキの自分の言動覚えて

る？ 改心が早すぎて逆に怪しいんだけど……」「

巡はいまいち信用し切れなかつたが、メルは札を差し出したまま動かない。

どうやら意志は固こよひだつた。

道程は戸惑いながらも仕方なさうにそれを受け取り、おそるおそるといった様子で疑問を口にした。

「ふ、ふう～ん。わ、わかつたよ。確かに、メルちゃんの言ひとおりだ。……そ、それで……だ、誰なのかな？ その子は……」

最初から巡の方にはなるべく視線をやらず、意識しないようにしていたようだが、そうもいかなくなつたようだ。

「あ、あの僕……」

「東西めぐるちやんでえーつすー よろしくねー」

いきなりハイテンションでさえぎられた。

巡を紹介された道程はよりいっそう動搖を始めた。

パチパチとまばたきの回数が多くなり、きょろきょろと田線が行つたり来たり。さつき一瞬見せた余裕のドヤ顔はどこへやら。
……どうしたんだらうこの人。そうか、自分のかわいい？ 元教え子が男子を連れてやってきたらこんな感じになるのかな？

「どうぞいめぐる……君。メルちゃんとはどういつた関係なのかな？」

待つていましたといわんばかりに胸を張るメル。

？

「なんとわたし達、結婚しました！」

「えええええ！？ うつそおーん……」

「してないしできなによー！」

ついつみより早くぐでかいリアクションをされ一瞬あせつたが、
巡は全力で否定した。

「ジョーダンだよ。近々そうなる予定だけごめんちゃんにはまだ
時間が必要みたい」

「たぶん永遠に埋まらないと思つよその時間は」

「……はあ、びっくりした。いやいやさすがにそれはないと思った
よ？ メルちゃんがお兄ちゃんに内緒でそんな……ねえ？ ……で、
本当は何者なのかな？」

まだおつかなびつくつ、とこった様子で道程は再び尋ねた。

「紹介します。セフレのめぐるちゃんです」

「なんとも…………？」

「違います！」

メルのじょもなし一言にこちいち大声を出し驚く中年男。
巡は面倒なのではつきり言つておくことにした。

「僕とメルちゃんは今日知り合つたばかりで、それ以上の関係では
ないです」

不満そうな視線を横からジリジリ感じるが、首を固定し受け流す。
道程はうつむいて首をひねりながら、いかにも聞こえるべらり
の独り言を始めた。

「なんにせよ異常なまでに好意を持つるのは違いない……。今日

知り合つた割にはお互いちゃん付けで呼んでるし……。もしかしてほんともうデキどるのか? ……くそり、このガキどりしてくれようか……。魔法でイ ポニ……。いやいつそホモに……。大体、ちょっと顔がいいからって……。顔が……。ん? んん?「

しばらく、ぶつぶつ言つていたが、何かに気づいたのか巡の顔を凝視しだした。

軽く目が血走つたおっさんに見つめられ、巡はかつてない身の危険を感じる。

「……ね、ねえ、ちょっと、前髪をこいつ、よけてみてくんない?
おでこだすみたく」

鬼気迫る表情の道程に逆らひつゝともできず、巡は言われた通りに従つ。

すると、次の瞬間道程が発狂したかのよつに奇怪な叫び声を上げた、

「あーーーー! やつぱり、南ちやんだ! 似てる! いや似てるつてレベルじゃねえ! あの頃の南ちやんそつくりだ!」

今まで以上の大音声に、巡はビクッと身をすくませる。さすがのメルも何事かと目を見張つているようだ。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 3

「あ、あれあれ！？ ね、ねえねえ、これどうこうと？ なんで南ちゃんが？ 本当に君は何者なのかしら？」

田を「じじ」すつて小動物的な動きをするおっさんに少しふりついたが、努めて冷静に答えた。

「あ、あの、多分その……南ちゃんってのは僕の母さんです」「そりそり母さん母さん……ってなんでやねーん！ 本人やーん！」

あまりにもひどいノリツッコミにじばらく場が凍りつく。

再びテンションの上がった道程の暴走が続いた。

彼はその昔、南のことによほど気にかけていたらしく、巡を見て飛び跳ねんばかりの調子で歓喜していた。

そんな中巡とメルは冷めた視線を送りながら、無言で出されたケーキをもくもくと口に運んだ。

「いやー、お兄ちゃんショックで幻覚見たかと思っちゃったよー

ある程度落ち着いたところで、巡は自分や家族のことと、ここを訪れたときわつを説明した。

メルによつて女にされたこと、自分を男に戻してくれるよう頼みに来たこと。

魔法で無理やりられた、のくだりを強調したが、その犯人はそ知らぬ顔でケーキをつづいていた。

「やうすると君はあの環ちゃんのお兄ちゃんになるわけだ」

「あー、やうだ、環は入学したんですね？ 今どこに……」

「どこのお兄ちゃん!」 メルが割り込んできた。

「え? むう帰ったでしょ? あ、別居してんだっけ」

「ちいっ! 遅かったか!」

「メルちゃんちょっと黙つてくれない?あれ? でも全寮制とかなんとかって.....」

「寮? そんなのないけどでもいいよそれ! 今度考えてみよっと」

「父さんまたウソついたな.....」

「父親に対する不信感がさうだったので」

「このまえ環ちゃんと一緒に南ちゃんがやつてきて驚いたよ。南ちゃんは相変わらず美人だったけど、さすがに年がね.....。最高でも十七超えちゃうともう駄目だよね.....。ちやんつて言つて年でもないしね」

「はあ.....」

「こしても.....ふふふふふへへへ! も、もまみらあの男! 南ちゃんに愛想つかれてやんの!」

危ない笑いを発する道程。軽く狂氣のようなものを感じた。
過去に駄と道程、南の間に何があつたのか巡は知るよしもない。というか知りたくもなかつた。

「.....どりでもいいですか? どうしてくれるんですか僕の体は? おたくの卒業生がこんなことして、許されると思つてるんですか? 慣れていなかいか? 巡はなぜか保護者代表のような、おかしな口調になつていた。

「うーん、でもしうがなによね、在学中からメルちゃん十年に一

度出るか出ないかの変態だつて有名だつたし

「そんなことないよ。五人に一人ぐらいだし」

「……もうそのぐだりはいいです。それにメルちゃん、自分の評価

下がつてるけどこの短期間に何かあつたの？ 前は十人に一人だつたじやん」

「やっぱりわたしも全然まだまだなあつて思い直して」

「自己評価低すぎだよメルちゃん！ もつと自信持つていいよ！ ていうか五人に一人もいたら社会とかその他もうもう成り立たないよー！」

確かにメルは今日一日で何人かの変態との出会いを果たした。

それで本人なりに思うところがあつたのだろうが、巡の中でトップはやはりメルだった。

ダントツで。

「まあそういうわけだからや、運悪く車にでも轢かれたと思つてあきらめてよ」

「どういうわけですか！ それに車どじろか戦車にズタズタにされた気分ですよ！」

そう軽く流され頭にきた巡は、自分の食べかけのケーキを狙つているメルに向かつて抗議の声を上げた。

「メルちゃん！ 全然ダメじゃんこのおじさん！ 話が違うよー。」「じめーんねー」

「こいつと笑つて可愛く言つ。

それがさらに巡の神経を逆撫でした。

滅多に怒る事のない巡も、今回ばかりはさすがに許せんとばかりに怒りをあらわにする。

「ちよつとなんの一人して！　だいたいお兄ちゃんとかなんとかバカなことばっかりって、本当に魔法なんか使えるの？　ただのキモイおっさんじやん！　どうなってるんだよもつ！」

その言葉に、道程のつやつや顔がまたまたかげりだす。

今度はぐわりとやりで心臓を貫かれたような表情になった。

「『い』『ごめんね、怒らないで。落ち着いて落ち着いて。うん。その顔で怒られるときお兄ちゃん死にたくないから』

わざとは比べ物にならないほど小さな声でぼそぼそしゃべりだす。

「いや、別に元に戻せない事はないんだけどね、個人的には戻したくない」というかなんと言つか

「え！？ 戻れるんですか？」

「……て、いうかあ～、その、た。わづ別に女の子でよくない？」

「いやです」

「もつたいないよ？ 絶対。女の子で可愛いところ得だし

「メルちゃんと同じような事言わないで下さい」

そう言われると道程はうーん、とあーとに手をあてて黙り込む。必死に何か考えているようだ。

やがて何か思いついたようで、ゆつぐつと口を開く。

「あのね、男に戻すということは、要するに魔法の呪いを解くといふことだよ。悪いところを直す。つまりお医者さんのようなことをするわけだけれども。手術とかつてすぐお金かかるよね？ うん、お兄ちゃんもいちおつ魔法でご飯を食べている身だからね。つ

まりね、ただで、というわけにはいかないかな。わかるかな？

お金と聞いて「え？」という反応をする巡。

道程の最高にうさんくさい理屈に、それもさうかも、と思つてしまつ間抜けな少女（少年）がいた。

お兄ちゃんは大魔法使い？ 4

「お金、ですか。具体的な金額つて……」「そりだねー、施術にカウンセリング、アフターケア込みでゼットこのぐらいかな」

道程はぴつと指を三本立てる。

「や、……三万円」

「巡回。お兄ちゃんそういうベタなボケはあまり好きじゃないんだよなあ」

ついでつゝも凍てつかんばかりのノリツッコミをした道程が呆れ気味に言ひ。

「三十円か。細かいのあるかな……、おつり出ます?」「出ないよ。……」「ううとうとき普通金額上げるよね?」「つてことは三千円……。……」「クリ」「いや、「クリ」じゃなくてね」「……さ、三万円ですか!？ まったくしょうがないですね！ じやあ毎月百回分割払いにしてくださいー」「いや三万じゃないし。やっぱり三万円ずつしか払う氣ないのね……。ていうかなんでキレ氣味なの?」「あ、保険証あるから三割で九千でいいんだ、よかつた」「保険とかきかないからね。勝手に安心しないでね」

なんとか値切らうとする? 巡にラチが明かないと思つたのか、ついに道程ははつきり金額を口にした。

「特別サービス。お友達価格で端数切捨てぽつきつ二千万。用意してもらえるかな?」

「さんせんまん……? それって円三五五だつたらどのくらいかかります?」

「……君は何世代にも渡つて払い続けるつもりなの? 言つとくけど分割払いは不可。施術は前払いで入金してからね」

「…………それは円で?」

「そりだけど……。何? どつかわけのわからない通貨で払つたりだつた?」

「そんな……」

あまりにも法外な金額にがくつと意識を失いかける巡。日々の暮らしにも事欠いているような彼の家に、当然そんな大金があるはずもなかつた。

衝撃の宣告でお通夜ムードになりかけた時、先ほどから一言も發せず巡の食べかけをおいしくいただいていたメルが口を開いた。

「あれ? お兄ちゃん、授業でやつたときとかそんなのパッパと直してくれたよね?」

「えつ? どうこうことですかそれは」

「そ、それはね。お兄ちゃんの大好きな『妹』たちだからね、うん、タダなんだよ」

「じゃあお兄ちゃん、メルのお願い。めぐるちゃんを元に戻してあげて」

「い、いくらメルちゃんの頼みといえどこれは……」

「えつ、そんな……。わたしお兄ちゃんのこと嫌いになつちやうかも……」

「い、いやほら、それはあれだよ、ほらメルちゃん!」

道程は慌てふためきつつ、手でなにかのジヒスチャーをした。

そしてメルが道程と視線を合わせること数秒。彼女は急におとなしくなり、

「……うん。わかった。今日はもう帰る。たまきちゃんはないしめぐるちゃんとは明日会える」

そう言つてゆっくりとソファーから立ち上がった。メルの不気味なまでの変わり身を見て巡は追及する。

「……ちよつと、なんですか今のサイン」

「えつ！？ い、いやあれだよほり、メルちゃん、次はカーブ行くよ！」

「そんなの『まかされないよ』なんなんですか！？」

「じゃあねめぐるちゃん。夜電話するね」

巡の問いに答えることもなく、メルは笑顔とともにさういい残しどアから出て行った。

メルにしては引き際があつたりしそぎていたので、巡は余計に疑心を抱いた。

道程は自分にはメルのあこがれがなくて弱冠へこんでいた風だったが、仕切りなおすようにして話を切り出した。

「……ふう、邪魔はいなくなつたしこれでゆっくりお話ができるね」

「ものすごく不自然な去り際だったんですけど一体何が……。あの、どちらにしろ僕にはそんな大金絶対に払えないです。ただでさえ貧乏なのに……」

「うん、実はそれは知つてゐる。環ちゃんが入学のね、面接に来たとき聞いたから

「それ、知つてわざと……」

「だからね、そんな巡君に今ぴったりのお仕事があるんだよ

「……なんですか仕事つて」

道程は「うーんとね……」と少し言ひにくそうにしている。何を言ひ出すのか、巡は嫌な予感しかしなかつた。

「実はや。卒業した女の子達、魔法使いすぎて目立つなって言つてんのにやりたい放題だから困つてゐる。もちろん野放しにはしてないよ？ 監視役をつけたりして様子見たりしてゐるし。でも最近人手不足で、その監視役が足らないんだよね。だから巡君にその手伝いをして欲しいなあ、なんて」

「……教育がなつてないですね。それは道程さん自身が責任持つてやるべきなんじやないですか？」

「お兄ちゃんはね、忙しいの。いろいろ運営したり商売したり授業したり盗撮したり。それにお兄ちゃんが直接叱つたりとかさ、ほらあんまり印象よくないし、角が立つしね」

「……はあ。でもそれをなんで僕に？　だいたい僕なんかにできます？」

「面接に来た環ちゃんもそうだったんだけどね。やっぱ南ちゃんの血筋かな、すこじよ君たち。ちょっと見ただけでもメルちゃん並の資質を感じる。きっと優秀な魔法使いになれるよ」

魔法……。つこわつきも家でメルちゃんを吹き飛ばしたあれのことかな……？

でも全然無意識だつたしなあ……。それになんかどんどん話がかしながら方向へ向かっている気がする……。

当初の予定と大きく変わりそうな流れに巡は戸惑いを禁じえなかつた。

「あの……そもそも魔法ってどうやつたら使えるよ?」になるんですか?」

こまいち実感の沸かない巡は、当然の疑問を発した。田の前にいる中年男性はどうにも怪しい。

「うーん、細かい原理とかは置いとくとして、美少女である事が大前提だね」

「それ自分がペテン師つて告白してないですか?」

「え? ああ、お兄ちゃんは別格だよ。そもそもお兄ちゃんが魔法に田覚めたのは、忘れもしない童貞のまま三十歳を迎えたあの日…」

「三十つで……、今いつたいいくつなんですか! 母さんが今三十五だからどう考えても五十オーバー……? いい年こいてこんな…」

「い、いやいや、ま、魔法使いに年齢なんて関係ないよ? うん。い、今こそ青春を謳歌してるんだ。それに老化を和らげる魔法かけてるから若く見えるのも無理はないし。……え? にしても童顔だつて? 童貞クサイとか言わないで。泣いちゃうよ?」

巡の中で道程の評価が童顔小型中年男性からロリコン童貞変態ジジイにクラスアップした。

母親の年齢から逆算しても道程の実年齢が五十過ぎであろう」とは間違いない。

だが栄養がたつぱりつまつてそうなふつくりとした丸顔、それに妙に甲高い声はどう見積もっても三十代、下手すると二十代に見えなくもなかつた。

「こことは道程さんが男性で唯一魔法が使えるってことですか？」

「男は基本使えないけどね、お兄ちゃんに似たような境遇の同志はあるよ、四天童っていう四人の童貞とかね。みんなお兄ちゃんより年下だけど、結構な使い手だよ」

「それは……なんかすごそうですね……。そのほかは美少女限定ですか？ でもなんで？」

「だつて美少女しか入学させないし教えないもん」

「……教えれば誰でも使えるってことですか？」

「全然ダメな子もいるからやっぱ人によつて適正あるよ。でも大体血縁だね。そのへんに女の子をさらつてきたりするわけじゃないから、入学する子達も身内の紹介とかがほとんどだし」

「僕は誰にも魔法の使い方とか教えてもらつてないんですが、……」

「多分メルちゃんに魔法をかけられたショックで目覚めたんだと思うよ。君はきっと天才だね」

巡はてつきりメルの呪いのせいだと思つていたが、そういうわけではなかつたようだ。

女の子になれば魔法力が覚醒する。メルは巡の中に眠る魔法の力を感じ取つたと言つていたが、果たして本当にそこまで見越していただろうか。

「でも、さつきのお仕事の話なんだけど。どうかな？」

道程がそれた話を元に戻す。どうしても巡をスカウトしたいようだつた。

「うーん……それって具体的にはなにをするんですか？」

「ああ、そうだね、えーっと」

そう言つて背後の棚から大きめのファイルを取り出し、綴じられたリストをペラペラめくつてみせる。

「これが要注意人物のリスト。ちょっと度が過ぎるかなって感じのね。この子たちをおとなしくさせてほしいんだ。お兄ちゃんちよつと怒つてるよつて。あんまり反抗するようならおしおきするんだけど」

最初に出てきたのは名前や生年月日から趣味やスリーサイズまで記入されたオリジナルの履歴書。

続いて顔のアップや全身を前後左右から撮つた写真、制服バージョンや普段着バージョン、シチュエーション別などと書かれて分類された写真がアルバムのように綴じられていた。

中には被写体が明らかにカメラを認識していない盗撮らしきものもあつた。

ざつと見たところ三、四十人はいそつである。そのどれもが美少女ぞろいだ。

「これは……す、すごい……」

「まあまづはこの危険度のところを見てもらつて、一番簡単なEランクぐらいの子からやつてもらおうかと」

「ランク付けとかしてるんですね……。どうやって決めてるんですか?」

「基本的には魔法力の強さと、どういった使い方をしてるかだね。後は性格。どんな問題行動を起こしたか、または今後起こしそうかとか、そのへんを総合的に判断してのランクね」

「ふうん……」

……Eランクが一番簡単つてことは、EからAまで格付けがあつてAランクが最高かな?

ずいぶん幅があるみたいだけど、最高ランクにされる子って一体どんな子なんだろうな……。

道程に渡されたリストをパラパラめくつていると、不意に見慣れた笑顔が視界に飛び込んできた。

潮見夢留 愛称 メルちゃん 危険度Sランク

「……ヤツだ。もしかして、とは思っていたけど、やつぱりいた。しかも危険度Sつて……。Aが最高じゃなかつたのか……。

巡は一瞬手を止めたが、履歴書のどこかの欄にオーナーというあり得ない単語が記入されている（おそらく本人の字）のが目に入る反射的にページをめくつた。

痛々しいプロフィールを直視することができなかつたのだ。

「……危険度Sつて、要するにどのくらいなんですか？」
「ええと、間違いでも魔法を教えた事を一生後悔しそうなレベルかな……」

「後悔つていうか全人類に対しても謝罪すべきですよ……。さつきなんか注意しなかつたんですか？」
「Sランクを」

「ほら、これぐらいの女の子つて傷つきやすい年頃じゃん。お兄ちゃんだつて嫌われるのやだし。それにあの子、お兄ちゃんがなに言つても聞かないし……」

「傷つきやすいって言つか……。逆にこっちが大怪我します……」

「ダメだこの人。」

「これ以上メルのような災厄を誕生させないためにも、この男を始末した方が世のため人のためになるんじやないかと、ふとそんな考えが巡の頭をよぎるのだった。」

「それでその……ちなみにお金つてどのくらいもいるんですか？」

「それは成果によるけどね。当然ランクが高い子を更正させれば報酬もはずむよ。Aランクだつたら一千万ぐらいだしてもいいかな」

「ええっ！？ そんなに！？」

「これならAランクたつた三人で呪いが解けるよ。それにこれで稼げば君のお母さん、南ちゃんだって戻つてくるかもしないよ？ お金がないから出ていったんでしょう？ いい話だと思うんだけどなあ」

「それだけが理由じゃないんですけどね……。あ！ そうそう。そういうえば環の入学、取り消してください。やつぱりこんないかがわしいおじさんの所で、写真撮られたりとか危険です」

「いかがわしい……。……それはダメ、絶対無理！ 途中退学は規約違反で罰金一億だからね！」

「なんですかそれ高っ！ ……それって今決めたんじゃないですか？」

「あ、そうだ。めぐる君ががんばつて一億ためればいいじゃん。高ランク狙いで行けば不可能でもないよ？ 呪いと合わせて一億二千万」

「……うーん。でもよく考えたら何で僕がメルちゃんにかけられた呪いを消すのに三千万お金払わなきゃならないんですか。直せるんなら直してくださいよ。被害者ですよ僕は」

「またケチくさいな君も。……別にいいけどね、男に戻っちゃつたら魔法は一切使えなくなるよ？ 魔法抜きでリストの子たちと渡り合つことなんてできないからね。そしたらお仕事は任せられないな。この話は一切なし。すると報酬はもらえず環ちゃんはそのままめぐる君のしょっぱい貧乏生活もそのままだよ？」

「…………」

環が学校に通い卒業すれば金が入つてくる算段だったが、道程と
いう人物を知つてしまつた巡は妹をこのまま通わせる気にはなれな
くなつた。

道程の言い分はもつともで、それに従えば妹の代わりに自分が仕
事をこなしてお金稼ぐ事になるわけだが、どうにもうまく騙され
ている気がしてすぐに首を縊に振れない。

いつの間にか桁外れの金額が飛び交つてゐるが、そもそも本当に
そんなお金が道程に用意できるのだろうか、という疑問もある。
しかし結局妹をこの男の毒牙にかけさせるわけにはいかないとい
う気持ちがそれに勝つた。

そして彼自身、今の貧相な生活から抜け出したいといふ思いもあ
つた。

そうした葛藤の末、巡はゆっくりとうなづく。

「……わかりました。僕やります」
「おおっ！ やつた！ これでまたハーレムに一人追加！」
「……今なんか言いました？」
「え？ なにも？」
「まあいいです。でもひとつお願ひがあります」
「うん？ なに？」
「環のことなんですが……。お金が溜まってから、じゃなくてでき
れば今すぐにでも退学させたいんですが」
「……むむ？」

またも道程が長考に入った。何を必死に考えているのかわからな
いが、その様子からはプロの棋士のような気迫を感じた。
ものすごい速度で損得勘定をしているのかもしれない。
やがて結論が出たのか、人の良さそうな笑みを浮かべて言つ。

「しょうがないなあ。南ちゃんの頼みとあつては聞かないわけにはいかないしね。いいよ。それで」

「……僕、南じやなくて巡です」

「一億円分ツケとくから頑張つて働いてね」

「はあ……。わかりました」

あまりにも簡単に莫大な貸しを作ってしまったことになるが、そもそも普通に考えればいろいろおかしい。おかしいことだらけだった。

かといって細かくつっこめば、道程のさじ加減一つでさらにおかしなり条件なりが一転三転しそうだったので巡はここで妥協することにした。

道程はロリコンオヤジではあるが、根っからの悪人ではない。巡はそう思つたからだ。というかそう思ひたかった。そんな救いようのない人間が存在しない事を。

巡がいんちきくさい誓約書のようなものにサインをし終えたその時、「ンコン」とドアをノックする音が。

扉を開けて現れたのは、短く刈りそろえられた頭髪にサングラス、黒いステッスルを身に着けたやけに体格のいい男性。

身長は190センチぐらいはあるだろうか。

無言のまま表情を変えず立ち尽くす姿は、まるで重要人物を護衛するVIPのようだった。

どこからともなく漂う存在感と威圧感は明らかに場違いな印象を『』える。

「なに? ビしたの? ……あ

道程は変わらぬ調子で男に問いかける。

いきなりの巨漢の出現に驚く様子はなく、道程の視線はその男性

ではなく彼とともに入室したもう一人の人物に注がれていた。
サングラスの男性に首根っこをつかまれている人物。それは巡の
クラスメイトの美道衆だった。

「衆ちゃん……また？」

「…………めんなさい……。つい本能に忠実になってしまって……」

「……」

「つい魔が差したとかって言つて欲しかつたなあ……」

道程が呆れたように言つた。

巡はスーツの男性にも驚いていたが、さらに突然見知った顔が現
れたので少し頭が混乱しかけていた。

「し、衆くん……？　どうしてこりに……」

「巡か……。君も来てたのか……」

「あれ？　一人知り合いなんだ。あーそつかあそこの学校だっけ。
まあそれはいいとして、衆ちゃん……。これで五回目だよ？」

「五回目つて衆くん一体何を……？」

「また男の子をストーキングして通報されたんでしょう？」

「違うんだよ、通報はされてないんだ、今回はたまたま職質受けた
だけで」

「それでちょっと近くの交番まで来てねコースなんだから変わらな
いでしょうが」

「ああ……なんか朝不良に絡まれた？　男の子を助けたとか何とか
……。それかな？」

「今日は自分が保護者として引き取りに行きました」

ずっと無言だった男性が低い声を発した。

「せつ…………」苦労だつたね。……衆ちゃん、約束は約束だからね、いいね？」

「…………はい」消え入りそつた美道の声。

「じゃあ後はよろしくトモヤ」

「了解、ボス」

トモヤと呼ばれた男性はそのまま美道を引きずつて再びドアから出でていく。

やうじえはあの扉の先はどうなつてるんだろ？　などと疑問に思ひ巡の耳にかすかな咳きが聞こえた。

「はあ…………あかりちゃんルートがそりそり終わりだったのに」

幻聴であつて欲しいその声は間違いなくステップに身を包んだ男のものだつた。

「何者なんですかあの人は」

二人が去った後、巡は謎の男について疑問を口にした。

「ああ、あれ四天童の一人だよ。『コードネームはトモヤ』

「あれが四天童……。『コードネームって割には普通の名前ですね…』

…

「だつてあいつが自分でそう呼んでほしこう。ビリセビリかのギヤルゲーの主人公がなんかの名前じゃない？」

またか……。

巡は心底うんざりした。まともそつなのが出てきたと思ったが、見かけだけだつたようだ。

「まあそれはいいとして、明日からめぐる君一人でやれつていうのもかわいそうなんで、衆ちゃんと協力してやつてもらうようにするから。ちょうどよかつた」

「え、いや、一人でやります。あの人はいません」

「まあそつ言わずにさ、一応彼は君の先輩にあたるわけだから。…

…まあほとんど成果が出でないんだけどね」

「衆くんはどういった経緯でこんな…」

「話すと長くなるけど、お兄ちゃんの中で男の娘ブームが来てた頃にね、彼を女の子として……」

「やつぱいです。聞きたくないです」

「すぐ飽きちゃつたからね、彼には申し訳ない」としたよ。罪滅ぼしといつては何だけど、彼にタダで部屋を貸してあげてるんだ。詳しい事は知らないけど衆ちゃん身寄りが田舎のおばあちゃんぐら

いしかないらしくてね。まあこりこりと面倒を見てあげてる

「はあ……そなんですか……」

巡は知りたくもない事情を知つてしまつて微妙な反応しかできなかつた。

「大丈夫、衆ちゃん今はアレだけきみちゃんと更正させるから。明日から仲良くなつてね」

「えー……」

急に憂鬱になつた。協力といつか障害になりそうな予感しかしない。

今までも極力かかわり合いを避けていたぐらいなのだ。それでも妙に気に入られてはいたが。

「じゃ、最後にめぐる君の連絡先だけ教えておいてくれるかな。携帯あるでしょ?」「嫌です」

「……即答されるとも兄ちゃんでもちょっとへこむよ? 何かあつたときとかで、困るでしょ?」「教えた方が何かありそんなんですが……」

「めぐる君、あんまり反抗すると契約破棄しちやうよ? そしたら別途違約金発生するからね。さつきサインしたでしょ? 基本的にお兄ちゃんの言う事には従わなければならんんだからね?」「わかりましたよ……」

やつぱり自分の決断は間違つていたのかもしれない。

早くも後悔の念に駆られながらも、巡は道程と連絡先を交換した。

「これで一通り用件は済んだね。じゃあお家の近くまで魔法で転送

してあげるから、田をつむつて

「……ちょっと待ってください、よく考えたら僕、このまま女の子

として生活しなきやならないうて事ですよね？ 今日一田はなんと

か「まかせましたけど、やっぱ無理がありますよ……」

「ふふつ、たしかに明日から女装して学校に行くといつのも無茶な

話だよね。そだなあ～うん

道程は後ろの戸棚を「じぞー」と漁りだした。

取り出してきたのは赤いベルトの腕時計。特に何の変哲もない。

「これで解決できるよ。魔法を込めるのに時間がかかるからもつじばらく待つてね。あ、ご飯食べてく？」

「いや、できるだけ早く帰りたいんですけど……」

道程は巡の返答を無視し、夕食を用意すべく奥の部屋に引っ込んでいった。

その後姿を見ながら、巡はどうにも不安を拭えなかつた。

今日帰れるのかなあ……。明日から本当に大丈夫なんだろうか…

…。

翌日。

巡は遅刻することなく登校した。

昨日遅刻＝変態魔法少女との遭遇というアウスマを植え付けられたらせいか、巡は何かに追われるようになに始終急ぎ足だった。

途中下駄箱で発見した「昼休みに体育倉庫でまつてます」という紙切れを破り捨て、教室へ急ぐ。

教室に入る前に、遠目から隣の席にメルがない事を確認しほつと胸をなでおろしながら自分の席に向かう。

席に着くとすでに登校していた花奈が顔をこじりて向けた。

「ねえ」

「は、はい？」

「なんで男子の制服着てるの？」

「いや、それはだつてほら、僕男だし。だいたい女子の制服なんて持つてないよ」

「……うん？」

じろりと顔全体をなめまわすようにねめつけられた。
至近距離で綺麗な顔に見つめられ、どきまきする巡。

「ちつ、元に戻ったか。にしても男のクセに女々しい顔つきね」

何かお気に召さなかつたようで、いらっしゃった口調で罵倒される。
だが花奈が男子に対して「機嫌斜めなのはいつものことで、昨日
が異常だつただけだ。

「そ、そつなんだ、昨日道程さんに会つて元に戻してもらつたんだ
……はは……」

「…………おかしいわね…………、あいつがそんな簡単に入助けなんて……」

「道程さんて変わつた人だよね」

「…………ふん。ねえ、なにその腕時計。……ださ」

花奈は巡の手首に巻かれた腕時計を田ぞとく見つけた。

女の子がするような赤いベルトの腕時計はやけに目立つし巡には似合つていない。

だが今一時的に男に戻れているのもこの腕時計のおかげなのだ。
外すわけにはいかない。

「あ、あの僕や、よく遅刻してたから、すぐ時間を確認できるやつに時計したほうがいいかなって」

「あつや」

花奈は鼻を鳴らしだけで、これ以上巡と会話する気はないこようだ。

昨日とはうつて変わって冷たい態度に、巡は困惑を隠せない。
……なんか昨日の御厨さんが別人みたいだなあ。少し寂しい気もするけど、本来こりうる感じなんだから仕方ないか。

気まずい空気を吸いながらかばんの中身を出して整理していくと、教室前方の引き戸が勢いよくがらりと開かれた。

バーン！ という効果音がつきそつな勢いで登場したのは美道だつた。

巡は激しい既視感を覚えたが、今日はひでにも美道の様子が違つていた。

「おはよーー 愚民どもー！」

美道はクラスメイト全員に喧嘩を売った後、悠々とした足取りで教壇に上る。

「皆の者聞け！ 僕はもつ男の尻を追うような真似はやめた！ だから男子！ もつ常に半径三メートル以上の距離をとる必要はないぞ！」

美道が声高にわざと叫ぶと、教室内にどよめきが走る。主に男子の間に。

「あいつ氣づいてたのか……俺たちの暗黙のルールに」「なんであいつ上から目線なんだ？」「みんな気をつけろ！ これは罷だぞ！」

「誰だ今罵とか言つたヤツ！ 」
ひたすらに来て尻を出せ…」

「やつぱりあいつ掘る気満々じゃねえか！」「誰だよ、余計な」と
言つて刺激すんなよ…」「やつぱ罵じやねえかよ…」

警戒する男子達。

美道は大げさな身振りを交えてそれをなだめる。

「待て待て。尻を出せと言つただけだぞ？ つまりケツをシバいてやるといつ意味だ。すぐにそういう方向に持つていくお前らの方が問題だわいへ！」

「今度はＳＭかよ……」「これからは五メートルだな……」「おこ、もつこいだら、あいつに触るなって」「ガチホモ野郎は消えろ…」

口々に言い合ひの男子生徒たち。その中の一言に美道がピクッとき応した。

「……今言つてはいけない事を言つたヤツがいるな……」

静かに室内を見回す美道。厳しい目つきで犯人を捜しだす。男子生徒たちはみんなすぐに顔を伏せたが、わずかに行動が遅れた巡は一瞬だけ美道と目が合つてしまつた。

「巡、お前があ！」
「ち、違つよ！」

美道はずんずん大またで巡のほうにやつてくると、前方に立ちはだかるように仁王立ちして見下ろしていく。

「さあ、臀部を晒しわが面前に跪くがよい！」
「だ、だからつ、さつきのは僕じゃないって！」
「お前じやなかつたとしてもお前だつたといつ」としておいてやるつ。よかつたな」
「よくないよ！……衆くん、一体何があつたの？　もともと変わつてたけどこんなメチャクチャな事を言う人じやなかつたでしょ？」
「……俺は間違つていたようだ。昨日あの後みつちり教え込まれた。男とエンディング＝バッドエンドだということを」
「何を言つてゐのか全然わからないんだけど……。それに俺つて……、昨日までとなんか別人みたいだよ？」
「これからは俺様キャラでいけば間違いないと、古今東西のエロゲー、ギャルゲーを制覇しつゝに乙女ゲーにまで手を染め出したトモヤさんに言われたのだ」
「そんな人の言うことなんて聞かない方がいいと思つよ……」

「そういうわけで巡。お前俺と付き合え」

「嫌だよ！　だいたい僕男だし！」

「……んん？　お前元に戻ったのか？　……男子との交際はトモヤさん」に固く禁じられたからな、バレたらブチ殺される

美道はちらつと隣の席の花奈を見た。

花奈は我関せずとばかりに携帯をいじっている。

「じゃあ花奈。俺の奴隸になれ」

「死ね」

「仕方ない、言い方を変えよう。俺と付き合え」

「さつさと死ね」

「とりつくシマもないな。せめて『なんであんたなんかとつ……一ぐらい言えんのか？』

「いいから死ね」

「貴様、後悔するぞ？　俺の美貌は誰もが認めるところだ。過去に

女子からラブレターをもらうこと数知れず」

「何も知らなかつた哀れな子たちからね」

「以前の俺には尻を拭く紙にも使えない」コミクズ同然のものだったが、これからはしっかりフラグ管理を行おうと思う

「無駄よ。あんたの性癖については校内で知らない人間はないでしょ？」

「俺は変わったのだ。これから女子と楽しそうにしていればその疑惑も自然と晴れるというもの。ハーレム要員その一にならないうちに俺に従つた方が得だぞ？」

「これは……格段に痛さが増したわね……」

「お前の同盟も破棄だ。思えば男子を紹介してもらう代わりとして魔法の悪用に目をつむるなど、我ながら恥ずべき行いをしたものだ」

「ちつ。急に手の平返したわね……。そもそもね、あんたの存在そ

「ものが恥ずかしいのよ」

「御厨花奈。貴様の罪状は氣に入らない男子生徒のロッカーに使用済みナップキンを放り込む等をはじめとした変態チックな迷惑行為だ。俺が断罪する！」

「そんなことしてないわよ！ 第一それじゃ魔法関係ないじゃない！ あんたマジで死なすわよ？」

「馬鹿め、俺のバックには四天童の一人がついてるんだ、そんなことをしたらどうなるか……ククク」

殺意のこもった目つきで睨みつける花奈を、不敵な笑みで迎える美道。

これまでも危うい関係ではあったが、ここにきてついに爆発した。今は花奈がやや不利な状況か。

やがて両者にらみ合いが始まる。

「花奈様、負けないで！」「私も花奈様にあんな目で見つめられたい……」「死にくされ美道！」「もげる！」

女子生徒がわけもわからないまま声援？を送る。美道の味方はいなかつた。

男子生徒たちはすでに皆知らんぷりを決め込んでいる。何人かは教室を離脱した。

巡も隙あらば脱出の機会をうかがっている。まさに一触即発。

「やめて！ 一人とも！ わたしのために争わないで！」

その時、ひときわ大きな声で一人の間に割り込む女子生徒が。一気にクラス全員の視線がその人物に集まる。

その人物とはやはりメルだった。今登校してきたのか、いつの間

にか、どこからともなく現れた。

ぽかんとする美道と花奈を尻目にメルは一人続ける。

「二人の気持ちはうれしいんだけど、今わたしは……」

メルの視線が巡の席へ向く。

だが席はすでにぬけの殻だった。

身の危険を察知する能力が芽生えはじめていた巡は、メルにみんなの注意が集まつた瞬間に脱兎のごとくその場を抜け出していた。

喧嘩上等？ 生意氣暴力少女 1（後書き）

サブタイトルはちょっと先走った感じになつてますが、お気になさらずに。

すっかり変態が出揃つてしまつて、新キャラの入る余地がないかも

……。

巡は教室から少し離れた所にある男子トイレに緊急避難していた。メルが来てしまった以上、なんだかんだでの一人の争いに巻き込まれるのは火を見るより明らか。

騒ぎが収まるまで教室に戻るのは危険だ。つかつに近寄らない方がいい。

だがまだホームルームまで少し時間がある。

巡はついでに用を足すと、チャイムが鳴るまで誰もいないトイレで時間を潰すことにしてた。

……はあ、僕は朝から一体何をやつてるんだらう。

なんでトイレなんかにこもつて……、……ん？ 待てよ、よく考えたら何で僕がこんな惨めな思いをしなければならないんだ？

何も悪い事なんてしてないはずだ。そうだ、ビクビクすることはない。昨日みたいに外見が女の子になっているわけじゃないんだ。堂々としていればいい。

メルちゃんにだつてビビる必要なんてない。なんかおかしな言動をしだしたら、次からはビシッと言つてやるべきだ。まったく、バカバカしい。さつさと教室に戻ろう。

巡はしばらく一人葛藤した後、勢い込んでトイレの入り口のドアを引いた。

すると田の前にメルの姿が。

巡はフルパワーでドアを押して再びトイレの奥へ後退した。

……おかしい。なんで奴が？ ついに恐怖で幻覚を見るようにな

つてしまつたんだろうか。

いや、違う。僕は恐れてなんかいない。そり、ビビつてなんかいないで。

今のはさつとメルちゃんに似た人が偶然男子トイレの前に……。

巡が必死に自分を「まかせつとしてこると、トイレの中にはぐさま侵入者が現れた。

その人物は微笑を浮かべたまま、まっすぐ近寄ってくる。

例え男子トイレだろうが全くためらじのない足取りは、間違いなくメル本人だつた。

ついわざとまでいきがつていたはずの巡は情けない声を上げた。

「ちち、ちよつと！　じい、男子トイレだよ！」

「それがどうかした？　たまには男子トイレで用を足してもいいよね？」

「ダメに決まつてるでしょ！　たまにとか気分の問題とかじゃなくて！　何のために部屋が分かれてると思つてるの！」

「えつ？　小便器にしないとダメ？　ヤダめぐるわやんたら！」

巡は早くも言葉を失い、戦意を喪失した。ビシッと言つてやるつもりが一瞬でメルのペースに飲まれてしまった。

「めぐるわやん急にいなくなつちゃつてビックリしたんだよ？」

「いや、急におながが……」

「わざわざ離れたトイレまで？」

「……ど、どうしてここが」

「魔法の力だよ、ま・ほ・う」

また魔法か……。本当に魔法なんだろ？　メルちゃんの場合、

野生の勘とか言われた方がしつくづくるような……。

なんでも魔法と言われて納得できるものでもなかつたが、口には出さなかつた。

何か言いたそうな顔をして巡を見て、メルは少しだけ驚きの表情をした。

どうやら性別の変化に気づいたようだ。

「あれ？ めぐるちゃん元に戻っちゃつたの？ つまんない」

「つまんないじゃないよ！ 全く誰のせいでこんな……」

「ど、こりこりとはもう一つの魔法も解けたのかな？」

メルの言つもつ一つの魔法とは、一次元の老人にしか興味をもてなくなるという、実質性欲を失うようなわけのわからない呪いのことだ。

今の巡は、道程の用意した腕時計によつて一時的にメルにかけられた魔法が全て解けている状態である。完全に魔法が解けたわけではないが、メルと出会つ以前の彼に戻つてしているのだ。

メルがいくら変態といえど女の子であることに変わりはない。それに性格に目をつむれば相当な美少女だ。

そんな子とトイレで二人きり。昨日は呪いのおかげかおかしな気分になることはなかつたが、今は勝手が違う。

それに彼女は必要以上に至近距離までにじり寄つてくるときた。こういつた状況に慣れていない巡は、どんどん心拍数が上がつているのを悟られまいと質問を浴びせた。

「ち、近いよちょっと……、あ、朝からビニ行つてたの？」

「ちょっと体育館倉庫に下見にね」

「……言つとくけど昼休みそこで待つても誰も来ないからね」

「え？ なんでわたしが呼び出したつて知つてるの？ 差出人は書

かなかつたのに」「元

「昨日の今日でそんなところに呼び出す人つていつたらね……。せめて体育館裏とかにすべきだったと思うよ?」

「……名前を書いたら来てくれないでしょ? わたし、うすうす感づいてたんだ、なんかめぐるちゃんに避けられてるって」

「そりや昨日の晩夜中に何回も電話かけられたら電源切らざるを得ないよ……。朝起きたら着信履歴がメルちゃん(はあと)で埋まつ

てて軽くホラーだつたし……」「メルちゃん(笑)で登録しておけばよかつた? そうすれば笑えるよね?」「余計怖いよ!」

巡は連絡先を教えた事を後悔した。とはいっても携帯を奪われ勝手に登録されたのだが。

だがこれほどまでに女子から熱烈なアプローチを受けたのは初めてだ。

考えようによつてはそこまで悪い気がしないでもない。

なんだかんかいつてもメルの外見は優れてかわいい。巡のこれまでの人生においても間違いなく三本の指に入るほどだ。

巡はこれでまたもな子だつたらなあ、などとありえない願望を頭に思い浮かべた。

「にしても本当にわたしの魔法解けたのかな? ……あやしい」

メルは訝しそうに巡の体を無遠慮に眺め回す。なぜか疑っているようだ。

自分で魔法をかけといて、ひどい話だつた。

「なにか魔法アイテムの匂いが……」

腕時計のじとや、道程から『えられた仕事のじとはなるべく黙つておきたかった。

明確な理由はないが、やはりメルがかんぐるといくながらなうだからだ。

巡は気づかれないよう赤くて立つ腕時計を袖の中に隠すように移動させた。

さりげなくやつたつもつだつたが、メルはそのわざかな動きも見逃さなかつた。

獲物を見つけたとばかりに巡の手首に手を伸ばすメル。袖をまくつてがつと食らいつく。

「ち、ちよつと…なにいきなり引きちぎりつとしてるの…」

「なにこの腕時計？ 昨日はしてなかつたよね？」

「え？ あ、ちよつと遅刻が……」

「これ文物じゃないの？ どうこいつとかなあ？ 自分でこんなのが買わないよね？ 誰かにプレゼントでもされたのかなあ？」

「やめてやめて、ちぎれるって…」

メルは鬼のような力で掴んで放さない。

「のまま有無を言わせず引きちぎられでもしたら田中も泣くられなさい。

巡は観念して道程にもらつた腕時計の事を白状した。

「……ふーん、それをつけている間は呪いが解けるの？ 便利だね」

「これね、余計にお金ふつかけられたんだよ？ お願ひだからいきなり壊そとしないでくれる？」

「ねえ、ちよつと外してみて？」

「ええ？ やだよ」

「外してみて？」

」

ギリッと手首を掴まれた。みしみしとメルの手が食い込んでゆく。

……自分で外せるうちに外しておこう。

巡はあきらめてするつと腕時計を外した。

一瞬。ピカッ！と全身からまばゆい光が放たれたかと思うと、巡の外見が昨日と同じ姿になつた。

「うわー、すーーい。一瞬でお肌が白くなつてムダ毛とかもなくなつてゐる。でもなんか気持ち悪いね」

瞬く間に女子に変身した巡を見て、メルが感嘆の声を上げた。

「……あのさ、いくら僕でも怒るよ？」

「それにちょっと声も高くなつてる！ あれ？ でも胸元は全然スカスカだね。かわいそうに、貧乳なんだね。どれどれ」「どれどれじゃない！ もうこれでいいでしょ？ 元に戻つても」「ちょっと待つて。めぐるちゃんがいけないものを持ってきてないかボディチェックをします」

「持つてきてないよ！ なんでこのタイミングで！？」

「だつて男の子の体をいじくつたりしてみんなから痴女だと思われたら困るし……」

「いまさら取り繕つても手遅れだと思つよ！ 多分みんなつすつす感づいてくるよ！」

「あ、でもここならそんな心配する必要ないよね。誰もいないし。うん、戻つていよいよ」

メルはそう言つてわざりに距離をせばめてきた。今にも襲い掛かってきそうだ。

本来なら巡も一応健全な男子であるわけで、こんな場所で一方的に女の子から迫られたらなにかしら間違いが起こつてしまふかもしれない。ついでつままで少しではあるが巡自身もまんざりでもない気分だった。

だが今、再び魔法がかかつた状態になり性欲が失せた巡は、メルの急接近にもたじろぐことはない。

むしろ彼女のふるまいに軽く腹を立ててゐるぐらいだ。もちろん変な気持ちになることもなく、全力で抗うつもりでいた。

今戻つたらなし崩しに犯される！

そう直感した巡は、そのまま様子を見ることにした。

それにここで文句の一つでも言つてやらねば、といつ思つもあつた。

「あれ？ 戻らないの？」

「……うん。あのせ、メルちゃんももうせ、悪ふざけもたいがいにしようよ。勝手に人に魔法かけたりして困らせてさ。僕すごく迷惑かけられたんだけど、まだちやんと謝つてもうつてないよね？」

巡は静かに、だが確かに怒氣を含んだ声音でゆつくり諭すように言つ。

そんな巡の様子がいつもと違つのを感じ取ったのか、メルの顔からも笑みが消えた。

「……ごめん。そうだよね、怒つてるよね……。わたし、めぐるちやんにすごい迷惑かけてるね。それなのにちゃんと謝りもしないで……」「めんなさい」

ついそうな表情で謝罪の言葉を口にするメル。そしてそのまま口を開ざす。

意外な反応に、巡は少しばかり驚いていた。どうせまたくだらない言い訳をするものとばかり思つていたから。

一人とも沈黙したまま、時間が過ぎていく。

……よかつた。メルちゃんもちゃんと話せばわかってくれるんだ。
さつきからうつむいて黙つたままだし、きっと少しは反省していく

れでいるんだね。そろそろここかな。

「わかったよ。もう怒つてないか」

「……ホント？ 怒つてない？ ジャあこれから、仲直りのセッ…」

「あー、はいはいもうじゃべらなくていいから黙つて反省して」

「めぐるちゃんのお説教プレイ、楽しみだなあ」

「知らないよそんなプレイ！ 聞いたこともない！」

「ね、お詫びといつてはなんだけれど……わたしの体を好きにしていいよ」

「お詫びといつては難だよ！ もうやつこいつのもいこからー」

急に活氣づくメルに遙は閉口する。

まつたぐ、すぐに変な方向に持つていじりとするんだから……。

「それじゃあ、せめてプレゼントをさせて。今のおべんちゃんこぴつたりがあるんだよ」

そう言つてメルは、そと制服のブレザーの内側を探る。
やがて取り出したのは、片手で握り締められるぐりこの太さの黒い棒。

「これ！ 魔法のステッキだよ！」

「魔法のステッキ……なんか妙に短くない？」

「伸縮式だからまだ伸びるんだよ」

メルが棒の両端を持って引っ張ると、すこし長さが伸びた。最終的にひじから指先ぐらいの長さになる。

「これね、例によつて振動機能付だよ

「いらないよそんな機能！　だいたいそれどんな慣例なのー…？」

「それをわたしに聞くの？　セクハラだよめぐるちゃん」

「『めん、聞いた僕が悪かったよ』」

「つうん、いいの。メルちゃんが教えてあげる。むしろ言わせて…」「言わなくていいよ！」

その時メルが差し出したステッキ？　がブイイイイーンと振動を始めた。

「見てほら！　す」^レ、めぐるちゃんの魔法力に反応してると…」「嫌な反応の仕方！」

メルがバイブステッキを胸に押し付けてきたのですばやく奪い取った。

不本意ながらも受け取ってしまったステッキは、見た目より意外と重い。

巡が手にした後も棒はしばらく小刻みに震え続けていたが、巡の止まれという念を感じ取ったのかやがて振動は止まった。

「それ、わたしが持つてるのと色違いのおそりなんだよ？　めぐるちゃんだったらもしかしてメルちゃん専用の魔法が使えちゃうかも」

「メルちゃん専用の魔法？　それってどんな…？」

「簡単なやつだと、飛雷矢魔法かなあ。フェザーライトニング。あとこの棒を股に……、じゃなくってステッキを魔法を当てたい標的に振りかざしながら叫ぶの」「…………ふ～ん。…………え～と、ふ、フェザーライトニング！」

巡はメルに説明されたとおり、ステッキをかざしてセクハラワードを口にした。

その瞬間、ステッキの先から放たれた雷の矢は、まっすぐ飛んでメルに直撃する。

ピシャッ！ バババリバリバリ！

メルの体のシルエットが激しく明滅する。巡は強い発光に思わず目をつむった。

やがて焦げくさい匂いが立ちこめる。

おそれおそれ田を開けると、メルの顔がすぐ田の前まで迫っていた。

「ちょっとめぐるちゃん……。いくらわたしが嫌いだからっていきなりそれはないよね……？」

唇の端をやや吊り上げてこらえるものの、メルの目は笑っていなかつた。

「ああっ、『じめん』 本当に使えるかどうか試して唱えてみたら…」

…

「絶対わざとだよね今……？ まっすぐこっち飛んできたよ？ とにかくバリヤー張らなかつたらメルちゃん確実に死んでたんだけど」

「いやだつて雷を当てる相手について…………あ、ぎ、ぎゃああああっ…」

メルは必死に弁解する巡の乳首をシャツの上からつねり上げた。いきなりの激痛に悲鳴を上げる巡。

別にメルを亡き者にしてやろうと想えていたわけではなく、ついうつかり考えなしに魔法を発動させてしまつただけだった。本当に魔法が使えるのか、半信半疑だったのもある。だが無意識にも標的はしつかりメルだった。

「いけないこと言つのはこの乳首かなあ！？」

「ち、乳首はしゃべらないよ！ いたたたた！」

「乳首をしゃぶりたい？ そいやつて『まかそうとして…』

「ち、違うつて！ は、放して、『めん、ごめんなさい…』

必死の懇願が聞き届けられたのか、乳首をねじ切られる前になんとか解放された。

だがメルの怒りは完全に収まつたわけではないようだ。

「今度やつたら母乳が出るまでねじり回すからね？」

「で、出るわけないでしょそんなの！」

「え？ 出るでしょ？ しかるべき手順を踏めば」

「ひいっ…」

笑顔で恐ろしい事を言い放つメル。

口調は明るいものの、さすがに巡のつづかりで殺されかけるのはたまつたものではないのだらう。

えもいわれぬ迫力があった。

やはりメルには逆らつてはいけないと、巡は深く心に刻み込んだ。

「やつぱりステッキは没収だね。メルちゃんもさすがに命は惜しいし」

「あつ」

田にもとまらぬ速さでメルにステッキをひったくられた。
メルがときおり見せる強靭な腕力や俊敏な動きはどこから来るのだろうか。きっとこれも魔法なのだろう。魔法であつて欲しい。どちらにせよ半ば人間離れしたこの子と、これからも関わらざるを得ないであろうことは明白だ。

そんな時あのステッキがあればこゝでいつ時自衛手段として使える。

そう考えた巡は、なんとかして取り返さうと言葉を繕つ。

「せ、せっかくメルちゃんがプレゼントしてくれたんだし、ありがたく受け取つておぐよ」

「なに？ そんなに欲しいの？ ジャあ、どうしてもその黒くて硬い棒が欲しいですって言つて」

「えつ、…………ど、どうしても、その黒くて硬い、ぼ、棒が欲しいです」

「はい、大きな声でもう一回！」

「ど、どうしてもその黒くて硬い棒が欲しいです！」

「そ、なんで僕がこんな事を……。でもここは耐える。気にするな、機嫌を損ねないよう」…………そ、これはただの发声練習だ。

「なんかキレ気味に言われてもなあ～。まあいつか、元はといえば

おわびのしるしつて話だったしね。でも、もしメルちゃんを背後から撃つようなマネしたら……わかるよね？」

「わ、わかってるよ。僕がそんなことをするわけないじゃない」

いざとなつたらやるしかない。

もちろんできればそんなことはしたくないけど、それも全部メルちゃん次第だ。

ていうか闇討ちされるようなふるまいをしている自分を改善しようとは思わないのかこの人は……。

再びメルからステッキを受け取った巡は、密かにそう決心しながら切り札を懐にしました。

朝から一波乱あつたものの、その後はこれといって大きな事件はなく一日の授業が終了した。

それでも細かい事を言い出したらキリがないが。

道程の腕時計のおかげで一時の平穏を取り戻した巡だが、彼にはやらなければならぬことがあつた。

道程への貸しを返すための仕事のことだ。

その件で巡は放課後、美道とともに学校の屋上に来ていた。

「これが今回のターゲットだ」

美道が写真を何枚か取り出して見せる。

巡と美道は屋上の端っこ、給水タンクの陰で待機していた。いかがわしいことをしているわけではないが、美道の指示でこうして隠れているのだ。

美道に渡された数枚の写真には、様々な角度から撮影された一人の少女が写っていた。

髪を一束結わえたショートヘアに、あどけない目元が印象的。全体的な雰囲気にやや幼さが残る。

道程の眼鏡にかなつただけあって、かなりハイレベルな容姿だ。

か、かわいい……。こんな子、この学校にいたのかな？ 一つ下の学年らしいけど……。

「まくやつたら仲良くなれたりして。わつ、この写真……。

「おい巡、お前がつづり見過ぎだ。田つきが危ないぞ」

「……えつ？ ほ、ほら、ちゃんと特徴をつかんでおかないと」

巡は「まかすように言つて慌てて写真から田を逸らす。美道はその様を見てためいきをついた。

「お前にはがつかりだ。そんなもので興奮するなんてな。これほどの美男子が目の前にいるというに」

「男子、でしょ」

巡は朝のトイレでのやり取りの後、すぐに腕時計を装着した。

基本的に魔法を使う時以外は腕時計を外す必要性はないと巡は考えていた。その他に女の子になるメリットが見当たらない。

正確にはあるはあるが、どこか犯罪のにおいがする用途ばかり思いつくので考えないようにしている。

ただ、性欲が失せるというメリットなのかデメリットなのかよくわからない変化があるので、時と場合によつては使い道がないわけでもない。

「ふん、まあいい。では簡単なプロフィールを伝えておくぞ。赤桐
陽夏、十五歳。三ヶ月前に転入。えー、身長百五十二センチ体重四
十一キロ。バスト七十……おっとの情報は必要ないな」
「いやそこからが大切な……」

七十……九、なのかジャストなのか。……どっちにしろ残念な感じかな？

「そんなものはどうでもいいだろう。問題はアレがついてるかついでいないか。それだけだ」

「なんかかっこいい言い方してるけど……。あれ？ 朝堂々と宣言してなかつたつけ、もう男に興味はないとか何とか……」

「女々しいぞ巡。今はそんな事を言つている場合ではない」

怒られた。なんかますますよくわからない人になっちゃったな。
無理やりパートナーにされたけど、うまくやつていけるだろうか。

「さてこの赤桐だが、現在危険度ランクはD。まあ低レベルな部類だ。だがこのランクはアテにならん」

「え？ なんで？」

「俺がつけたからな。俺が問題行動を発見して申請したのち、お兄ちゃんが危険リスト入りにした。つい最近の話だ」

標的は道程によつてちょっと道を踏み外した魔法少女。巡はそう思つてゐる。

道程の言い分によると魔法を悪用しているとかなんとか。だが巡は実際魔法だなんて、メルと出会うまで見たこともなかつた。

日常的に魔法が悪用されていると言われてもちょっと信じがたい。とにかく彼女は素行に難ありと判断されたということだ。

見た目は申し分ない美少女。巡には何が問題なのか、見当もつかない。

「そもそもこの子はどうして問題があるの？」
「まあそう慌てるな。すぐに見せてやる。そのためにはいつか隠れているのだからな」

屋上に上がるや頃や、いつもとかくれんぼを命ぜられている。正直言つて美道と二人きり、ずっと物陰にかがみこんでいるのは息苦しい。

授業終了とともにやつてきてから、かれこれ一十分近く過ぎようとしている。

早くしてくれないかな、と巡が思つていると、屋上の扉が開き何者かの足音が聞こえだした。

巡はそろそろと給水タンクの後ろから首だけ乗り出して、屋上の出入り口のほうを確認する。

足音の主は紛れもなくさきほど見た写真の少女、赤桐陽夏だった。彼女は周囲を見渡しながら悠々と足を進め、ちょうど屋上の中心あたりで立ち止った。

屋上はそこそこ広さなので、よほど注意深くなればこちらに気づかれる心配はない。

しかしながら彼女は放課後一人でこんなところに来たのだろうか。手ぶらでやってきた彼女は、なにをするでもなく立ちつくしている。

これからなにか つまりは大掛かりな魔法でも始めるつもりなのだろうか。

ことが起こるのを今か今かと待ち構えていると、陽夏がおもむろに制服のブレザーを脱ぎだした。

「おおっ。……うげっ」

巡は思わず身を乗り出す。美道はぱぱやくその首根っこを捕まえ引き戻した。

「何をしどるか。今見つかつたら面倒だぞ。それにたかが上着を脱いだだけだろうが」「こ、これからもつと脱ぐのかも……」

「アホかお前、そんなわけないだろ？……。いつたいなにを想像しとるんだ。お前のようなのをマツリスケベと言つのかもな。ほら、見てみろ」「

やけに冷めた態度の美道に不満を覚えつつも、巡は物陰から「こそと様子をうかがう。

何をしているのかと思いや、陽夏は一人で準備体操らしきものを始めていた。手首足首をぐりぐり回したり、飛び跳ねたり。

人の目を意識していないせいか彼女の動作はダイナミックだ。そのためスカートの翻り方はかなりきわどい。

陽夏はそれ以上脱ぐ事はなかつたが、落胆しかけた巡先生を満足させるには十分だった。

「ふん、白か……」

「……うん」

二人は陽夏のパンツの色について確認しあつた。満場一致だ。

その後美道はどうでもよさそうにすぐに顔を引っ込んだが、巡はさらに目を凝らしていた。

すると彼女の背後、屋上の出入口が再び開くのに気づく。扉から男子生徒がぞろぞろと吐き出された。

「ねえ、あれ！」
「来たか……」

美道は別段驚く様子もない。最初から彼らが来る事を知っていたようだ。

男子生徒の数は六人。それぞれ容貌や体型もバラバラで統一感がない。髪を少し染めた不良っぽいのもいれば、眼鏡をかけた太った男子もいる。

六人は少し距離を置いて陽夏を取り囲んだ。

「へへ……、このまえは世話になつたな」「このときを待つてたぜえ……？」「せいぜいお手柔らかにな！ ひやつひやつ！」

はあ、はあ

男子生徒たちは下卑た笑みを浮かべながら、陽夏に向かつて口々に言葉を発する。全員どこか興奮しているようだつた。

「ほんと懲りないなあお前らも」

異様な集団に囮まれながらも陽夏に氣後れする様子は一切ない。助けを呼べやうにな屋上でこんな状況になつたら、かなりの恐怖のはずだ。

「し、衆くん！ 大変だよ陽夏ちゃんが……」

「……いきなりちゃん付けか？ お前一人で勝手に親しくなつてゐな

「どうしよう！？ 助けに行く？ でもあの人数じゃ……」

「まあいいから、黙つて見てる。下手に出て行つたりするとややこしくなるからな」

衆くんは女子に対する非情だ。やつぱり全然変わつてないじやないか。

このままじや陽夏ちゃんが……。あれ、でもどうなるんだらう。まさか集団で……。

……い、いけない、なにを想像してゐんだ僕は！

「ほら、早くはじめよーぜ」

「クク……望むところだ！」

陽夏の一言で、正面にいた男子生徒が彼女に飛びかかる。

「あつ、てめえ抜け駆けは許さねえ！ 一番手は俺だ！」

続けて一人。

あつ！ダメだ！

巡は思わず目をつむつた。陽夏が魔法を使えるとはいえ、直前まで呪文を唱えるような素振りはなかつた。
ましてや相手は多勢で、同時攻撃もありうる。
その場の誰よりも一回り小さく小柄な彼女が、あの人数を撃退できるとは到底思えない。

ドツ、ドスツ、ガスツ！

鈍い音が響き渡る。どんな惨劇が繰り広げられているのか、目を閉じた巡にはわからない。
巡が血の氣の引くような思いでいると、続けてすぐ悲鳴がこだました。

「うおひ」「ぐわあひ」「ひいっ」

だが聞こえてくるのは男子の野太い悲鳴ばかり。
不思議に思った巡はおそるおそる目を開けた。
そこには殴る、殴る、蹴る、殴る、倒れたところをひたすら容赦なく踏みつける陽夏の姿があつた。

ど、どうなつてゐんだこれは……。

魔法？いや思いつきり肉弾戦だ。ひたすら打撃しかない。
それにあの子、嬉々として倒れた相手を踏んづけてる……。

「！」このおひ

最後の一人が踊りかかるも、陽夏は素早い動きで身をかわすび

ろかカウンターで拳をボディーにまっすぐ突き刺した。

相手は吹き飛ばされ地面を転がり悶絶し、起き上がる事ができない。

あつとう間に一人の女子生徒を残して全員が地に横たわる図ができるがあつた。

「あ～あ、全然ダメじゃん。前と変わつてないし。やる気あんの？」

陽夏は倒れている男子生徒を一人一人げしげしひ足蹴にして回る。

「おつ」「あつ」「はふん」

陽夏が蹴るたびにそこそこで気持ち悪い声が上がる。

陽夏はやつてしまはらく氣色悪い楽器を奏でていたが、

「こまいち張り合ひがないんだよなあ……」

そうつぶやくとつまらなさをついついと壁上を後にした。

彼女がいなくなると美道は啞然とする巡を置いて倒れている男子生徒たちに近寄つていつた。

巡もなにがなんやらわからず後を追つ。

「今日もえがつたわあ～」「ああ。あの容赦のない打撃……たまらん」「もつと蹴られたかつたなあ……」「陽夏たんかわいいよはあはあ」

上半身を起こした男子たちは、口々に感想？を述べていた。事態を把握できない巡は美道に尋ねる。

「なにこれは……？　どうこう」と？

「まあ、つまつこつらは△男の集まりなわけだ

「△男……？」

巡はてつきりたちの悪い不良に因縁をつけられた陽夏が、屋上で
リンチにでもあうのかと思つていた。

だがそれはすぐに間違いだと気づいた。

男達はあれだけボコボコにされたにも関わらず誰もがすがし
い表情をしていたからだ。

体を痛めているはずなのに今も楽しそうに談笑している。

不良ではないにしろたちの悪い集団であることに変わりなかつた。

「いやあ、誘つてくれてありがとう。噂には聞いていたがよかつたよ。俺も入会させてもらひ」

「おめでとう。君が会員十四号だ」

握手を交わす男たち。

いかがわしい会の会員が増えたようだ。
やがてそのうちの一人が巡と美道に気づいた。

「な、なんだ君達は。いつからここに？ 入会希望か？」

「そんなわけあるか。この変態どもが」

「僕ら、実はずっと見てたんですけど」

「な、なに……、見ていたのか？ おい、この事を陽夏ちゃんにバラすなよ……？ 僕たちはケンカをふっかけるフリをして相手をしてもらつてるんだからな」

「知るか。ゴチャヤ、ゴチャ抜かすと責様……」

「「「うおおおおおお」」

その時背後で歎声があがつた。巡と美道も驚いてそちらを振り向く。

すると一人の男子が財宝でも発見したようにあるものを両手で空高く掲げていた。

それは女子の制服、すなわち陽夏がさつき脱いだブレザーだった。忘れていったのだろう。

「うおおおお！ まさに神の落し物！」 「うひょおおお！ おい！ ちょっと貸してみろ！」 「待て待て、ここは平等に人数分に

切り裂いてだな……」「バカ、それだと部位によって格差が出るだろ」

一斉に騒ぎ立てるM男たち。

「こいつは俺のもんだ！」と第一発見者が必死にありもしない所有権を主張します。当たり前だがそれは陽夏のものである。

「いや俺たち仲間だろ……？」と一人が説得に当たるも一步も譲る気配がない。

「構わねえ奪い取つちまえ！」と一人が強攻策をとろうとする。

今にも争奪戦が勃発し今度こそマジバトルが始まリそうな危険な雰囲気だ。さつきの陽夏とのやりあいの時とは比べ物にならない。このままだと死人が出そうな勢いだ。

悲しいかな彼らには制服を陽夏に届けてあげるという選択肢はないようだ。

危ない連中の雄たけびと異様な空気に巡は氣圧されたが、美道はお構いなしにその中に切り込んでいく。

「おい、貴様らそれをこつちによこせ」

「なんだあ！？ 邪魔すんじゃねえ！…」

ものすごい殺氣だつた。彼らの全身から放たれるオーラは、ただのM男ではない、と感じさせる迫力があつた。

しかし美道も負けてはいない。

にやりと薄笑いを浮かべて言い放つ。

「この俺が誰だかわかつた上でそんな口をきいてるんだろうな？」

「あんだ？ 知らねえよてめえなんか！」

「……お、おい、こいつ、一年の美道じやないか！？」

誰か一人が邪魔者の正体に気づいたようだ。

その声には驚きと恐怖の感情が入り混じっている。

「ほ、本當だ！ ヤツだ！」「な、なんだとっ！？ ビジッしてこんなとこに……？」「ま、まさかこいつら屋上で………」

彼らの顔色が一瞬にして恐怖に染まり、場に戦慄が走った。美道衆の雷名は下級生、上級生問わらず校内に轟いているのだ。その名を聞いて震え上がる男の子は男子にあらずとまで言われている。

「うわやうわや言つてないで早くしろ。犯されたいか？」

「うわああああ……」

陽夏の制服を投げ出し、我先にと一田散に逃げ出す男子生徒たち。結局屋上には巡と美道の二人だけが残された。

「し、衆くん……。なんという脅し文句を……」

思わず後ずさる巡。当然彼も身の危険を感じずにはいられない。

「素するな、文字通り脅し文句だ。なんだまだ疑つてるのか巡。そんなに俺を信用できないか？」

「そ、そんなことないよ、うん。し、衆くんは生まれ変わったんだからね！」

巡は「うん」と即答しそうになつたが、下手な事を言つて再び覚醒されたら困るのでとりあえずあわせておく。

本人がそう言つているうちはずたぶん大丈夫。たぶん……。そういう言い聞かせながら。

「さて。ではこの制服を人質にするか」

美道は男子生徒が捨てていった陽夏の上着を拾い上げた。

「いや人質にはならないでしょ。人じやないし」

「それは例えだ。そうは言うがお前、制服がなくなるとリアルに困るだろう。結構高いしきつちり採寸もしただろうしな」

「まあ確かにそれはそうだけど……」

なんか地味だなあ……。それに程度の低いいじめのよひで気が引ける。

「そもそもさ、あの子魔法……使った？」

「よくわからんが使つとるだろう。あんな小柄な体で、男子生徒が吹き飛ぶような威力は普通に考えておかしい」

確かにM男たちのリアクションが多少大げさだとしても、そのやられつぶりは凄まじかつた。

彼らに戦いの意思はなかつたようだが、あれだけの数を悶絶させるぐらい攻撃するとなると大変だ。

逆に手や足を痛めたりすることだつてあるだろ。だが陽夏にそんな様子は全くなかった。

「おそらく魔法による肉体の強化が、攻撃の瞬間に衝撃系の魔法を放つとかそんなところだろ。たぶんな」

「うへん、でも悪用つてほどでもないよな……。現に迷惑びじいろが喜ばれてるし」

「甘いぞ巡。俺は許さん」

「どうしてさ?」

「あいつは好き勝手暴れているだけなのに、あれだけ男子に人気が

ある。不公平だと思わないか？　過去に俺がどれだけ苦労したか…

…」

「それ完全に衆くんの個人的な嫉妬だよね……」

それに今は男子なんてどうでもよくなつたんでしょう？

巡はそう言おうとしたがやめた。これ以上この話題を振るのはよくないと判断したからだ。

「いや実は……」なんて切り出されたら悔やんで悔やみきれないと、

「で、どうするの？」

「ボコボコにして顔面崩壊させる。さすがにブサイクに殴られて喜ぶほどの真性ドMはいないだろ？。これで奴の天下も終わりだ」

「なんか主旨が変わってきてるよ？」など。そんなどしたら道程さんには怒られるんじゃないの？」

「む、そうか……。なら調教して俺のハーレム要員に……」

「いやそれも怒られるでしょ……」

巡が美道の荒唐無稽な発言にあきれていると、またもや屋上の扉が開け放たれた。

現れたのは話題の人物、陽夏だつた。

勢いよく走り寄ってきた陽夏は、巡たちを見て不審そうな顔をする。

「あれ？ おまえらはさつきの仲間か……？ いや違つか。まあどうでもいいや」

陽夏は巡と美道の顔を交互に見比べながら独り言のように尋ね、勝手に自己完結した。
かなり大雑把な性格のようだ。

「ねー、あたしの上着知らない？ ここに忘れたみたいなんだけど……」

やはり忘れ物に気づいて戻ってきたようだ。
すぐに陽夏の視線が美道の手にしている制服へ落ちる。

「あつ、それここにあつたやつだ？ あたしのなんだ、返してくれよ」

「うむ、いかにもここにあつたものだ。返してやつてもいいがその口の利き方はいただけないな」

「え？ あ～、えつと。あたしの忘れ物、お捨いになつてくれてありがとう。どーかお返しちゃサイ」

「……バカにされてる気がするがまあいいだろ。ある条件を飲めば返してやられたこともない」

「じょうけん？」

「これからお兄ちゃんの下へ出頭してもいい。まほ学の校長のことだ、とぼけても無駄だぞ」

「えー、やだ。あのおっさんなんかキレイ」

道程さん、陽夏ちゃんはあなたのことが生理的に受け付けないそうです。

衆くん考え直してまともに交渉してくれてるみたいだけど、どうにも無理があるなこりゃ。

「やうか……。いいのか？」この制服がどうなつても

美道はまるで大切な家族や恋人の命を握っているかのように言つ。

……うーん、やっぱりなんか違う。

「えー？ そりやなくなつたらやだけど……。どうなつてもいいって言つたらビーするつもつ？」

やうだよ。ただ捨てるつて言つてもなんだかね……。

「そうだな……。制服にぶつかけて……」

「ちよつと待つた！ なにを言おうとしてんのー！」

「……え？ ぶつかけ？」

「もういいよ制服はかわいそうだから返してあげよう！」

巡は美道から制服をひったくるとそのまま陽夏に差し出した。

「あ、ありがと……」

陽夏は受け取りながら小ねくつぶやく。まだ少し顔を赤らめていた。

か、かわいい……。

さきほど暴れていた人物とは思えないしおらしい態度にギャップ

を感じたのもあり、巡は内心とさめこっていた。

「巡お前何を勝手に……。まあいい。もとから人質をとる必要などない。堂々と力づくで連れていく」とひょい

「えつ、ホントに?」

ぱつとうれしそうな表情をする陽夏。
なんだらう、そんなに殴り合いたいのだらうか。

「準備をするから少し待つてる」

そういうと美道は背中を向けて歩き出した。
少し離れたところで立ち止まり、なにかじわじわやつている。
気になつた巡はその背中に近寄つた。

「何してるの?」

巡が背後から覗き込むと、美道は包帯のような白い布を右手にぐるぐる巻きつけていた。

……ボクサーみたいで、本格的だ。女の子相手に本当に殴り合いつる気なのかな……。

「遊んでいる時間はないからな、はじめから全裸で行かせてもうつ
「全力で、ね」
「相手はおそらく何らかの魔法を使つてゐる。なういうのも遠慮なく使わせてもらひとしよう」
「あつ、そういうえば衆くんも魔法使えるんだっけ」
「まあ俺は一時期お兄ちゃんに女子として扱われていたが、実際男だからな。中途半端なものしか使えない。だがそれでもヤツを仕留めるのには十分だ」

そういうえば男の娘がどうたらって言つてた気がするけど……。
うん、まあいいや、深く掘り下げないでおこひ。

「巡、しかと見よ！ これが魔法で鋼鉄と化すわが拳！ アイアン
ナックル、略してアナル！」

「うわっ、最悪な略し方！」

美道は布を巻いた右手に左手をかざすよつとして呪文？を唱えた。

「……ふう、強化完了」

……が見た目には何の変化も見られなかつたので、巡は強化されたという拳に触れてみる。

すると布に巻かれた拳は人間の手とは思えないほどガチガチに固まっていた。

「うわっ、これはすごい……」

「実際鋼鉄化しているのはこの魔力が込められた布だ。本当は肉体を直接鋼鉄化できればいいのだが」

「強化されたのはわかつたけど、いくらなんでもそんなので殴つたらまずいよ、相手女の子だし」

「女だからこそ思う存分いけるのだろうが」

「……え？ 女の子を大切にするんじゃないの？」

「……む？ ああ、いかんいかん。今はそういう設定だつたな」「設定！？ 設定つてなに！？ 変わったんじゃなかつたの？」

「巡、お前はバカだな。こんなもので殴りつけたら相手の顔面を崩壊させるどころかお亡くなりになつてしまつぞ。これは単なる脅しだ」

「それならいいけど……」

結局また脅し？ 脅迫が好きなのかなこの人……。ひくでもない。その時後ろからじれた陽夏が声をかけてきた。

「なあ、なにを『じゅわ』『じゅわ』やつてんだよ。早くしりょく……もしかしてやつぱりびびつてんのか？ なつかな~」

陽夏は小さかにした態度で美道を挑発する。

「よし。遠慮なく顔面をこかせてもらいつとすのか

「ちよ、ちよっとやめなよ！」

簡単に挑発に乗った美道は巡の静止も聞かず、向を直つてすいつと前に出る。

「おつ、やつとやる気になつたか

「安心しろ。一撃ですぐに終わらせてやる

お互いが余裕の表情でにらみ合へ。どちらも口の強さに自信があるようだ。

ただその強さ、どちらが本物なのか。実際に戦つてみるとまではわからぬ。

喧嘩上等？ 生意氣暴力少女 8（前書き）

すいません、久しぶりの更新です。

そのまま両者至近距離でにらみ合いつ事数十秒。お互いが身動き一つせず、いつになつても手を出さない。

……あの一人の中ではお互いをけん制し合つてゐるんだらうか。きっと皿に見えなことじふだせめきあいが……。

そんな巡の考えとは裏腹に、しびれを切らしたよつた陽夏の声。

「なあ、もつはじめていいのか？」

「あ？ ああ、いつでも構わん。まあ万が一貴様が俺に一撃でも入られられたらのふぐおおおつ！？」

「じゅうつ！」

言ひ終わらないうちに陽夏のストレーントが美道の顔面にめり込んだ。

ひとりきわ鈍い音がしたかと思つと美道の体が宙に投げ出される。三メートルほど空を飛んだ美道は、受身も取れずに地面に全身をしたたかに打ち付けじろりと転がつた。

そして「むううん……」と一唸りした後ピクリとも動かなくなつた。美道の宣言どおり一撃で終わつたようだ。

……変な悲鳴。

「……し、衆くん弱つ。さんざん威張つてたわりに……。ちつきのにらみ合つはなんだつたの？ あと魔法も意味なかつたし」

陽夏は勝負は決まつたといつのに、追いすがつてつづ伏せに倒れている美道の尻をうれしそうに踏みつけている。

完全に気絶しているのに、全く容赦がなかつた。

陽夏は敗者にムチを打ちまくった後、満足そうな顔で巡に向き直つた。

「さて、次はお前の番だぞ」

「え？ 僕？」

なぜか僕まで戦う……、いやボコられることになつてる……。まずい、このままだと衆くんの一の舞だ。喧嘩なんじろくにしたこともない僕にかなう相手じゃない。

それに強い弱い以前に、なんかこの子普通じゃない。なんていうか……根っからの暴力好き？ 戰闘民族？
いや待てよ。いつの間にかバトル前提になつてゐるけど、こいつとしては別に戦いを望んでいるわけじゃない。

ちょっとおとなしくするように注意をすればいいだけだ。

「待つて。僕に戦いの意志はないよ。」
「うん、わかった」

陽夏は意外にもすんなりおとなしくなつて、ゆっくり歩み寄つてきた。

そうだ、何も戦う事なんてない。人間には言葉がある。それによつて相互理解を深めてきんだ。

暴力で解決するなんて野蛮な生き物がすることじだ。こんな子だつてきつと真撃に話し合えばわかってくれるはず。

まずは理由。それを聞かないことには話にならない。

「ねえ、どうして君はそんなに暴力をふるつるだい？」

「ふんっー。」

「どうつー。」

巡のわき腹に右フックが返ってきた。

「ぐあー、な、なーすかねんだよー、こお鍋つくりこやねひにまつた
ぱりたじゅ……」

「え？ これは立派な話し合い方だぞ？ 肉体言語を使っての」「うぐ…………、そんな言語知らないよ！ だ、だいたいなんて言ったのかさっぱりだよ！」

「なに？ しうがないやつだな……、訳してやるーか。今のはな、脇がら空きだぞ！ つて言つたんだよ」

ぐつ……。ダメだこの子。おやこお話をなうない。ふざかてるのかマジなのか……。

いや、マジだ。目がマジだ。

「なんなの君は。そつまでして僕をボコボコにしたいの？ 何の恨みがあつて？ って言つてゐるそばからなんで拳を握り締めてゐるの！」

拳で語りあつた方が早いわ」と

語り合ひが一方的な罵倒にならむ。

「うひーでも口ではうまく説明できないんだよ……。うん、な

まろ!!

じや
一発だけ。おねがい、ね?
すぐ終わるから

「一発あつたらもう十分だよね！？」
僕きっと再起不能にならぬ。

？ そんなに殴りたければサンドバックでも殴つてればいいじゃん

三

「無抵抗のものを殴つても楽しくないし。抵抗があるときほど殴つた時の喜びも大きいもんだ」

「僕無抵抗なんだぜー!」

「じゃあせめて、選ばせてあげよー、右足で殴られるか左足で殴られるか

「足で殴るんだ! 斬新だね!」

陽夏は今にも巡に襲いかかりそうだった。

進退窮まった巡が何とかこの場を開けないかと考えてこると、

「待ちなさい!」

何者かの声が屋上に響き渡った。

巡が声のしたほう、屋上の入り口のほうを振り向くとそこには一人の女子生徒が。

彼女はのしのしと大またに巡のそばまでやって来る。

「あつ! メルちゃん、どうしてここにー!」

「それがね、偶然通りかかったの」

「真顔でサラリとウソつくね。ここ屋上だけど? す、い不自然な登場だし、どうせ尾行してたんでしょ?」

「……やっぱりめぐるちゃんの前ではつそはつけないね。本当は瀕死になつためぐるちゃんを助けたあと、わたしが代わりに襲おうと思つて今か今かと待ち構えてたんだけど」

「うん、やっぱりじんどんウソつこつこよ。本当のことなんて聞きたくない」

「ちょっとガマンできなくなつて早まつちやつたみたいだからもつちよつと待つてるね」

「いいよもう! また隠れようとしてしないで! 絶対に僕の田の畠へとこらにいてー!」

陽夏は不思議そうにメルを見て囁く。

「だれ？ 仲間？」

「違います」 即答する巡。

「違います、恋人です」 すかさずメルの返事。

「違うよ！」

「あつ、そつか愛人か」

「ただのクラスメイトだよ！」

「えつ、それはつまり一からやり直そうって事？」

「いまマイナス百だから一からやり直すっていう表現は当てはまらないよ」

「え？ ……そ、そんな……。丘点満点だなんて……。うれしい！」「いやいやいや、マイナスって言つたんだけど、メルちゃんってあれかなあ、都合の悪いところは聞こえないのかな？」

「うん？ やんと聞いてるよ？ マイナス百ひとつせつまり裏を返せば満点つてことだよね！」

「勝手に裏返さないでよー 大胆に裏返すねほんとー」

突如現れたメルによって場の空気はあつといふ間に持つていかれてしまった。

「メルちゃん、一体いつから見てたの？」

巡はいきなり現れたメルに質問する。
隠れて様子をうかがっていたと言つが、ビニまで本当なのや。道程に頼まれた仕事内容は伏せておきたいが、メルの返答によつてはもうばれてしまつていいかもしない。

「めぐるちゃんがその子の写真を見ながら下半身を『ンソ』『ンソ』やつてるとこからかな」

「やつてないよ……最初からいた僕でも知らない光景だよそれは……」「わたしには未来が見えます。ひそかにズボンのポケットに写真を忍ばせためぐるちゃんが、おつちにかえつてから一人でゆっくりと……」

「あーもう一ビニから見てたらそんな細かいところまで見えるの！？ そんなに言つならこれはメルちゃんに渡すよ……」

巡はポケットから美道に受け取つた数枚の写真を取り出し、ビニシとメルにつきつきた。とは云えどこか名残惜しそうな巡先生だった。

「やつたあ、今夜のおかずゲット！」

「なんでそうなるの、それは陽夏ちゃんの写真だよ……」

「え？ だつてわたし両方いけるし」

「うわつ、サイアクだ」

メルは巡から渡された写真を懐にしまつむと、陽夏のほうに顔を向けた。

「わあて、今回せあの子を更正させればいいんだよね」

「あ、あれ、やっぱ知ってるんだ……」

「うん。めぐるちやんがわたしに隠し事をしていたことはのちのちベッドの上で問い合わせることして」

「こつも一緒に寝てるみたいに言わないでくれない…？」

巡はメルちゃんが絡んでくるとすこく嫌な予感がするんだよなあ、と思ったが現状巡一人では更正なんてとても無理そうだ。美道は全く役に立たなかつたし、ねこらがつたまま当分動き出しそうになー。

メルは改めて陽夏に向かつてあこわつをする。

「はじめまして、わたし、メルちゃんです。陽夏ちゃんつてこうんだよね。ヒナちゃんつて呼んでいい？」

「別にいいけど……、もしかしてメルつてあの……？」

「そうだよ、まほ学の。だからヒナちゃんの先輩でもあるよ」

「へえ～、あんたがあのメル先輩かあ……。そんな話に聞くほどでもなさそりやん。けつこうかわいいし」

「そんなんあ～、ヒナちゃんのほうじて超かわいにし今にも押し倒しちゃうそりだよ～」

「…………」

硬直する陽夏をよそに、メルはうれしそうな顔でひそひそと巡に耳打ちしていく。

「ちよつと今の聞いた？ めぐるちやん。この調子なり今日お持ち帰りできちゃうかも！」

「こや、向ひつてるから。今絶対引かれたよ」

わりと好感触だつた第一印象を一瞬で覆してしまつ、それは変態少女の定めだつた。

メルは再び陽夏に向き直る。

「うーんと、どうしようかな。ヒナちゃん、ぶつまつが好きなんだよね？ それじゃまずはお尻を思いつきりひっぱたいてもらおつかな？」

「え？ えーっと……」

「あつ、もしかして何か道具を使った方がいいかな？」

巡は後ろからメルの腕をつかんでぐいっと体を180度ターンさせる。

「ちよつとメルちゃん！ あんた何しに来たんだ！ まじめにやりなよ！」

「え？ だつてえ……。じゃどうすればいいの？」

「……うーん、ああいう子は自分で痛い目を見ないとさつとダメだと思うんだ。他人の痛みがわからないからためらいなく暴力を振るうんだと思う」

「ふーん、そういうものかなあ。じゃあメルちゃんが女王様をやればいいんだね？」

「よくないけどね、メルちゃんがなんとなく理解してくれただけでもうれしいよ」

「やつぱりダメかもしない……。

さすがの陽夏もどこかおかしな雰囲気を察したのか、ちよつと困ったような顔で提案をする。

「あ、あのせ、やつぱり一方的に殴るのもあんま面白くないから、そつちも遠慮なくかかってきなよ」

「チャンスだよメルちゃん。向こうもああ言つてゐるし」「うーん、じゃあどうしようかなー」

メルは立てた人差し指を口元に当てる、顔を傾ける。

……悩むほど選択肢があるんだらうか。なにかこのシンキングタイムは非常に危険な予感がするぞ……。

「決めた！ アークメテオフォール（通称アクメ）にしよう！」
「なんかすごそうな名前だけど……。どんな魔法なの？」
「うーんとね、空から巨大な質量を持った隕石が落下して対象を跡形もなく粉砕するの」

「ちょっと、まんまじゃんそれ！ なにそれ全然スケール違うよ！
これはちょっとしたケンカみたいなものでしょ！？」

「落下的衝撃でこのあたりはしばらく人が住めなくなるかなあ。あ、安心して。わたしとめぐるちゃんだけは生き残るよ！」
「それだつたらいつそのこと僕も一緒に殺して！」

「ちょっと時間がかかるからまっててね」

「ストップ！ ストップ！ ちょっとでそんな覚悟できぬよ！
だいたいメルちゃんの魔法は極端すぎるんだよ。なんかないの？
こうちょっと驚かせるよ！」
「ええー？ そんなこと言われてもなあ……」

またも思案顔になるメル。

そんな強力な魔法が本当に使えてしまうのか気になるとひるだつたが、試しにやってみてともいえないのが怖いところだ。

やがてメルは何か思いついたようで、ハツと目をパツチリ見開いた。

「あつ！ いますゞくぴつたりの魔法思い出しちやつた！」
「えつ、なになに？ どんなの？ 使うのはきちんと一から十まで

僕に説明してからにしてね！」

「いくよー！ アンダースティール！」

「だから待てって！」

巡が慌てて止めに入るも時すでに遅し。

メルがパツと取り出したステッキの先が、ピカツと光る。ステッキの指示示す先はもちろん陽夏。

巡は一瞬大災害を覚悟したが、周囲には何の変化もおきない。当の陽夏もただ目をぱちくりさせているだけ。

「……ち、ちょっと、数分後大地震を起こすとかそういうのじゃないでしょ？ うーん！」

巡はビクビクしながらメルを問い合わせる。

「じゃっじゃーん！ さてこれはなんでしょーか？？」

ステッキをしまったメルの手には、いつの間にか文物のパンティが握られていた。

「えっ？ パンツ？」
「そうです、これがヒナちゃんの……、あ、間違えたこれはわたしのだった」

「ちょっとなんで脱いでんのさー？」

「正解はこっち！」

もう一枚の白いパンティを高々と掲げるメル。すると陽夏の顔色が変わった。

「あ、え？ あれ？ そ、そんな！ うそ！？」

陽夏は慌てて両方の手でスカートを押さええる。
その顔色がまるまるに真っ赤に染まつていぐ。

「正解はヒナちゃんの脱ぎたてパンツでしたー！　ぱりぱり
「ええ～っ！…」

巡は驚きの声を上げながらも、その視線はパンティと様子のおかしい陽夏の間を何度も行ったり来たりしていた。
……なんて恐ろしい魔法なんだ……。でも、なんかすくわくわくするぞ……！

メルは両手でパンティの両端をつかみ、傾きかけの太陽にすかす
ようにして顔の前に持ち上げた。

光を反射しキラキラと神々しい輝きを放つていて。

「それでは不肖、わたくしメルが神妙に検分させていただきます」
「わ、わあー！ や、やめろっ！」

慌てて奪い返そうとする陽夏。だがスカートがめくれてしまつのが
気になり、大胆な動きが取れない。

「めぐるちゃんパース！」

巡にむかつて下から上に手を振つてパンティを放る。
布きれが宙を舞い、上向きに両手を広げた巡の手元にふわりとパンティが乗つた。

これが陽夏ちゃんの……。まだかすかにぬくもりが……。

「か、返せっ」

陽夏が血相を変えて巡につかみかかるとする。
スカートをおさえつつ小走りでやってきた陽夏の手が、パンティ
をひつたくるその寸前。

ぱたり。

白いパンティが、赤く染まつた。

興奮した巡が垂らした鼻血によつて。

「あーつ！ 血！ 鼻血たれてるよ…」

「……え？ あ」

陽夏にそつ指摘されてやつと氣づく巡。その間もぼたぼた鼻血は流れ続け、さらにパンティは赤く染め上げられていく。

陽夏が手元にさつと取り戻すも時すでに遅し。白かつたパンティに赤いまだら模様ができてしまつていた。

「ひつ……、もつはけないじゃんか……」

軽く涙目になる陽夏。そんな彼女を見て一人は申し訳なさそうに謝罪する。

「ヒナちゃん、ごめんな。まさかめぐるちりんがそんなマンガみた
いな事になるなんて思わなかつたから……」
「…………」「ごめん」
「こままじや家まで帰れないよ……」
「大丈夫、メルちゃんの貸してあげるから」
「えつ、予備のパンツなんて持つてるのか？」
「ん？ さつきまでわたしがはいてたやつだけ？」
「やだよそんなの！ ていうかなんで脱いでるんだ！？」
「返す時も洗わないでいいからね」
「な、なんで！？ あ、洗うに決まってるでしょーが！ いい、い
らない！」

メルはポケットから取り出した自分のパンツを陽夏に握らせようとするが、頑なに拒否された。

すでに戦意を喪失していた陽夏に向かって、メルはせりて追い討ちをかける。

「でもヒナちゃん！ オ互いノーパンとこうじとは、これで五分だね。ここからが本番だよ！」
「もーいい！ あたしの負けでいい！ もう帰る！」
「決着はキックボクシングで決めるよー。じゃ行くよ、えいー！」
「な、なに考へてんだよ！ うわっ、み、見えるつて！」
「ほらほら、ヒナちゃんもどんどん攻めてきてー！」

メルはためらいなく足を上げて、へろへろの攻撃を繰り出す。田の前で繰り広げられようとしているノーパンバトルに、巡の興奮度は最高潮に達していた。

「う……鼻血が止まらない。頭がクラクラしてきた。こ、このままだと……、ぶつ倒れちゃいそうだ。
でもこの戦い、僕がきちんと見届けないと……一秒たりとも見逃せない！
あつ、でももっぱり無理。もつ手がブラッディハンドだよ、どうしよう。

……あつ、そうだ！

その時巡は、左手に巻きつけていた腕時計を外した。するとまばゆい光とともに、巡の体が女子のものへと一瞬で変化した。

途端に鼻からとめどなく溢れ出ていた出血がピタリと止んだ。

「君たち、はしたない真似はやめたまえ。スカートにノーパンでキックボクシングだなんて、やつすい企画モノのAV以下だよ」

弱冠高くなつた声で巡女史は一人をたしなめよつて。浮かべているのは余裕の表情。

今の巡は性欲が消えた、いわゆる賢者モードである。ただし一次元のおじさんには弱い。

「ど、どなつてんだ？ 急に声が変わつて顔も女っぽく……」

巡の変化を見て驚きを隠せない陽夏。陽夏のスカートをつまみあげようと強硬手段に出よつとしたメルがすぐに答える。

「めぐるひやんは女の子のクセに男の子の格好して性的興奮を得ているんだよ」

「違つよー。なんでもうこいつウソつくかなあー。」

「昨日はどつちでオ 二ーしたの？」

「つるさいな！ だいたいこいつちだととてもそんな気にならないんだよー！」

「つてこいつとは女の子の時に自分のハダカの写真を撮つておいて、元に戻つてから……」

「考え方かなかつたなあ！ こいつになるとすげえ知恵が回るね！」

「わたしにも後で写真分けてね」

「撮らないよ！ なんであげなきやなんないのー。」

「じゃあわたしのと交換ならいいでしょ？」

「えつ、えつと……い、いやよくないよー。」

そんな二人のやりとつを見て、ゆつくり後ずさりをする陽夏。あればビ勝氣だった彼女が、明らかにおびえている。

「へ、变态だ……。こいつら……」

「え？ なにヒナちやん。聞こえなかつた、もう一回」

「変態だー！ もうやだー！」

陽夏は叫びながら屋上の扉へ向かって逃げ出した。

途中転がっていた美道にけつまずきそうになつたが、「邪魔なんだよ！」と言つて鬱憤を晴らすように動かない彼を一、三発蹴りつけた。

ギイ、バタンと屋上の扉が閉まるとい、後には変態だけが残された。

「……あーあ。行つちやつた。メルちゃんのせいで失敗だ」「めぐるちゃんが早く脱がないからダメだつたんだよ」「そんな別れ道どこにもなかつたよね……。……ああ、ビツじょうこれ」

巡は手に持つた血のついたパンティを見て困惑する。

「それ、なんかすつゝいいやらしいね。ある意味。……貸して、わ
たしが明日ヒナちゃんに返すから」「僕にその言葉を信じひとつ？ これは僕が責任を持つてキレイにしてから返すよ」「そう言つてネコババする気でしょ！？ めぐるちゃんのヘンタイ
！」
「しないよ！ 絶対に君にだけは言われたくない！ 絶対に！」「ヘンタイでもなんでもいいから渡して！」「なに開き直つてんの！ いや開き直つたといつよつ本性を現した
か！」

ぎやーぎやーとパンティをめぐつた二人の争いは、すっかり日が暮れるまで続いた。

そして美道は一人が帰つた後もずっと転がつたままだった。

訪問！ メルちゃんのお家

翌朝、通学路。

メルに遭遇したトラウマで、すっかり遅刻するようなこともなくなった巡はゆつたりとした足取りで学校へと続く道を歩いていた。巡は朝からずっと悩んでいる。

彼の鞄には、昨日激しい口論の末勝ち取った陽夏のパンティが忍ばせてある。

自分が責任をもって返すとメルに言い張ったものの、実際これをどう返したものかと頭の中はそのことでいっぱい。

昨日の晩、道程から電話があり陽夏から自分への変態男装疑惑は晴れたようだが、それでも彼女とは顔をあわせずらかつた。

巡は昨晚の道程との電話の内容を思い出す。

「いやあ、めぐる君。お手柄だよ。さつきねえ、陽夏ちゃんがやつてきてねえ、『変態に狙われたくないからどうにかして』ってお兄ちゃんにすがってきてさ。いやあ、あの陽夏ちゃんがねえ、あんな弱々しい一面を見せるなんてちょっと感動しちゃつたよ。一体何をやつたんだい君」

「僕は別にたいしたことしてないですよ。あの、もしかしてメルちゃんにこの仕事の事教えたの道程さんですか？ なんか知つてたみたいなんですけど」

「え、……あ、それね。いやあ、あのあとなに話してたの？ つてしつこくてさ、ついつい……。ま、まあ毒をもつて毒を制すみたいな感じで彼女にも手伝つてもいい事にしたんだよ」

「毒っていうか猛毒ですよ！ もうめちゃくちゃなんですから！」
「で、でも結果オーライでしょ？ 大丈夫大丈夫。陽夏ちゃんには

ちやんと説明して、全部わかつてもういたから。もうひりんめぐる君のことものね」

「へ、そうですか……。で、結局陽夏ちゃんはびうなるんですか？」

「あの子ね、狂戦士の魔法かかってるんだよね……。身体能力、とにかく攻撃力が上がり、そんで暴力性が増すつていう。あの子本来すごくかよわい子で、どうしてもそれを克服したいって言つからお兄ちゃんがかけたんだけど、解けなくなつちやつた。えへへ

「えへへじゃないつすよ！　なんてことしてんですか！」

「いや、本人は知つてるし喜んでるからまあいいかなー、と」

「そんなんでいいんですかホントに……。で、今回の件はこれで終わりでいいんですか？　やつぱりダメですか？」

「いやいや、合格だよ。陽夏ちゃんもちよつとはおとなしくなるだろつし、いいものを見せてもらつたし。めぐる君には引き続きお願ひするよ。次のターゲットとか詳しい話は衆ちゃんから聞いてね。じゃ、おやすみ」

……そういえば衆くんつてあの後どうなつたんだろう。まあ別にいつか。

巡は美道のことが一瞬頭をよぎつたが、すぐじりじりともよくなつた。そんなことよりこいまは大事なミッションが控えてこるので。

「めぐるせんぱーい！」

男子が持ち歩くには危険なこのアイテム、じりじりてくれよつと歎む彼を呼びとめる女子の声が聞こえた。

巡には先輩、なんて呼ばれるような間柄の後輩はない。しかも下の名前で。

……この姫は、もしかして。

慌てて後ろを振り返ると、そこにはにこやかに笑顔を振りまく美少女の顔が。思つたとおり案の定陽夏だつた。

ひょこつと一箇所だけ結わえた髪がチャームポイントの彼女は、目線の少し下から上目遣いにこちらを見つめている。

その愛らしく熱い視線を受けて思わずでれつと頬が緩みそうになる。

だがその頬は一瞬にして苦悶に引きつった。

どすっー、じゅー！

巡の腹を太鼓よろしく陽夏の左右の拳が交互に一発ずつ叩いたのだ。

「つおしゃー……な、なにするんだよいきなり！」
「え？ あいさつに決まってるじゃん」「
「ど、どじが！ ボディーブローを入れただけでしょ！」「
「ちゃんと敬語であいさつしたんだけどなあ」「
「いや全然伝わってないから、敬う気持ちとか！」「
「おはよう、じぞこます。で一発だつたんだけぢ？」「
「それじゃ先輩の方が一回多く殴られることになるみたいね！」「
「……うーん？ って言つても先輩にタメ口はよくないじやんか」「タメ口ー、今すじこタメ口だよー。」

巡はぜえぜえと息も絶え絶えに陽夏をいさめた。

しかし彼女は悪びれる様子もなくただにこにこしている。自分がおかしな事をしているなんて微塵も思つていなによくなそんな顔で。

「昨日道程のおっさんに聞いたんだけどさ、巡せんぱいって、メルせんぱいに女の子にされちゃつたんだって？ すっげーなあ、ふふ

つ

「いや笑い事じゃないよホントに……」

……他人事みたいに笑つてゐるけど、自分だつて道程さんには魔法（呪い？）をかけられたクチでしようが。
だけど本人はそれが苦とも思つてないんだよな。むしろ楽しそうにしてるし。

「あー！ めぐるちやん！ それにヒナちゃんも！ おはよー！」

巡はその声にとつたに身構え、陽夏はさつと巡の陰に隠れた。
一人の視線の先はやはり笑顔全開のメル。手を振りながら小走りに近づいてくる。今日もやたらとスカートが短い。

「お、おはよー。……メルちゃん今さ、学校の方から来たよね？」
「なんで通学路逆走してるの？」

「うん、ちょっとね」

「……ちょっとなに？ ちょっとねって言われても全然納得できな
いんだけど……」

今日も今日とて彼女は朝一から不審すぎた。

しかしこれ以上追求してはならない、と巡の中で警報が作動する。
無理に尋ねたところで聞かなければよかつた……、と後悔するこ
とは田に見えてるのだ。

『まかすよ』と背後の陽夏へ声をかける。

「ほひ、メルちゃんだよ、あこせつしないの？ 敬語で」

巡の背中で『まかすよ』まる陽夏は、完全におびえていた。昨日の男子生徒たち（＝）をボコボコにした時の威勢はどうへやい。

「オ、オハヨウ、ゴザイマス」

「陽夏ちゃん、それはないんじゃないかな、つづー。」

背中を叩く肉体言語。ついでここ、とでも言わんばかりなのは巡にも伝わった。

「おはよ！ 昨日のヒナちゃんの写真、すぐよかつたよ。びっくり。ちやんと写真立てに入れて部屋に飾つてあるから」

「いやメルちゃん、あれはそういう類のものじや……」「……」

被写体があたりの方向向いててカメラに気づいてないし……。

「し、写真てなんの……？」

「あれ？ ヒナちゃん知らない？ ジヤ今日わたしのお家にこいつか。見せてあげる。もちろんめぐるちゃんも一緒にね」

「えっ、こや、あの」

「僕はいいよ。女の子同士一人で……」べべつー。

ふたたび背中ドン。今度のは「かわいい後輩を一人変態の住処に遣わすつもりか」、とこう解釈であながち間違いはないだろう。

「といひでめぐるちゃん、きのうのアレは？」

「……なにアレって」

「だーかーらあ、ヒナちゃんのパン……」

「あーはいはいそれね！ 心配しないでいいよそれの」とせー

「えつ？ 今日はわたしの番でしょ？ 早く出しね」

「番とかそういうのないからー。」

「もう！ しょうがないなあ、十万までなら出すから」

「すごいぶん出せるねえ！ 僕一瞬迷っちゃうぐらいだよー。」

「そんなに嫌がるつてことは……、まさか今履いてるの…?」「履くわけないでしょーが! ちゃんと鞄の中に…」

「そこかっ!」

「うわっ、やめろ!」の変態!」

昨日の続きとばかりに再び繰り広げられるパンツ争奪戦。メルは鞄を狙いつつも巡の体にボディタッチするのを忘れない。

対する巡はどうしても引き気味になってしまい、そしてついには背を向けて走りだした。

すでに陽夏は一人が言い争っている間にとっくに脱出してくる。遠くから学校のチャイムの音が聞こえる。遅刻まであと五分。巡は全力疾走しながら今日も波乱の一日が始まりそうな予感がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7199u/>

外法少女と魔法少年

2011年12月17日18時52分発行